國學院大學学術情報リポジトリ

折口信夫の戦争歌と国家神道：神・天皇・民族の戦ひ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 阪本, 是丸
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001000

折口信夫の戦争歌と国家神道

――神・天皇・民族の戦ひ――

阪本是丸

一　はじめに

戦時中、東京堂から『讀書人』といふ月刊の読書雑誌が毎月刊行されてゐた。[1] その昭和十七年十二月号（第二巻第十二号）の「東京堂編纂　新刊分類目録　昭和十七年十月」の「内容大意」欄に、折口信夫[2]の戦争歌集『天地に宣る』[3]が紹介されてゐる。それには「いとほしきものをいくさにやりて後しみじみと知りぬ深き聖旨を他二百餘の戰爭歌集。」とある。わづか二行四十字ほどの紹介欄で、この一首を以て折口の「戦争歌集」の内容を端的に読者に把握させようとしたものである。その意図は筆者には不明であるが、なかなか鋭い着眼である。

ところで、この『讀書人』記者が紹介した「いとほしきものを　いくさにやりて後、しみじみ知りぬ。深き　聖旨（ミムネ）を」といふ一首は、「陸軍少尉藤井春洋、わが家に來り住みて、ことしは十五年なり」との詞書のある藤井春洋の応召・軍務の様を詠つた一連の短歌[4]のうちの一首であり、折口歿後に出版された『倭をぐな』にも収録されてゐる。数ある

折口信夫の藤井春洋（折口春洋）を想つて詠つた短歌の中で、いかほどの評価がなされてゐるのか寡聞にして知らないが、「しみじみ知りぬ。深き　聖旨を」といふ下句は、長年にわたり「天皇の本質」を追究し続けて来た折口信夫にして始めて可能な「短歌表現」と言へよう。(5)

折口信夫にとつての大東亜戦争が「深き聖旨」による開戦であつたことは、『天地に宣る』巻頭の「大君は　神といまして、神（カム）ながら思ほしなげくことの　かしこさ」、「暁の霜にひゞきて、大みこと聞えしことを　世語りにせむ」などの歌からも明瞭に窺ふことが出来る。しかし、実際に折口が天皇の「深き聖旨」をしみじみと思ひ知つたのは、「神と天皇」と「まつりごと」との相関関係を考へ続けて来た折口が「まつりごと」としての戦争を「心に實感として持つことの出來た人」となつてからである。その実感は戦時下の多くの国民に共有されてゐたと思はれるが、それを「戦争短歌」として表現出来るかどうかは別の問題である。(6)『讀書人』の記者がこの一首に折口の戦争歌集を代表させたのも、大東亜戦争が「聖旨」に基づく「正規の戦争」であること、それを端的に而も意味深く表現してゐる「短歌」と感じたからかも知れない。

惟ふに、この「いとほしきものを　いくさにやりて後、しみじみ知りぬ。深き　聖旨を」には、折口信夫のほぼ終生に及ぶ「神と天皇と人間」の追究が象徴的に「短歌」として表現されてゐるのであり、それは同時に所謂国家神道時代を生きた折口自身にとつての民族神道としての国家神道の表現でもあつた。無論、さう考へるには或る前提が必要となる。折口信夫と国家神道との間に何らかの密接な関係が存在すること、これである。

折口信夫は、後述するやうに、国家神道の主柱であつた神社神道と主に人的関係を通して戦前・戦後にわたり密接な関係を有してゐた。そのことは、『天地に宣る』巻頭の前記「大君は　神といまして」の歌を「釋迢空」名で初めて「公表」したのが昭和十七年五月十一日付けの『皇國時報』（第八一五号）の七面においてであつたことからも窺

はれる[7]（その二・三面には折口信夫の名で「禊ぎの話　禊ぎと祓へと」も掲載されてゐる）[8]。また、その五年後、折口は「大御言　現に　顯しく宣りたまふ。神ながら　神といまさず。今は」と詠つた。この歌は昭和二十二年一月六日付けの『神社新報』（第二六・二七合併号）に四面に「釋迢空」名で掲載されたものであり、その三面には折口信夫名の「神道の友人よ」も掲載されてゐる。これは単なる偶然ではないのであり、折口と神社神道[9]との親密な関係を示す一つの事例である。

言ふまでもなく、『皇國時報』は戦前の国家神道を支へた民間神祇三団体の一つである大日本神祇会の機関紙であり、『神社新報』はその大日本神祇会と皇典講究所、神宮奉斎会の三団体が発展的に解消して設立された神社本庁の機関紙である。どちらも神職などの神社関係者が主な読者であつた。折口信夫の考へが「大君は神といまして」から天皇は「神といまさず。今は」に変つた事情は扨て措くとしても、折口が戦時下の国家神道時代の神職や国民に向けて「大君は神といまして」に代表される「神と天皇」と「人間（民族・国民）」との関はりについて、それを「戦争歌」の形態・表現で他の誰よりも荘厳に数多く詠つた事実は厳として存在した。そのことを最も良く知つてゐたのが神社界であり、天皇の「深き聖旨」が「神」を抜きにしては語れないことは、戦時下の神職たちの謂はば常識であつた。その常識を短歌として表現出来る最も有力な歌人で神道にも造詣の深い学者[10]、それこそが折口信夫であると神職は認識してゐたのである。

大東亜戦争の開始から一貫して「大君（天皇）と神」そして「大君の伴雄」を題材とする「戦争詩歌」を作り、それを国民に向けて「発表」し続けた歌人にして学者は折口信夫を措いて他には存在しなかつた。そのことは、大東亜戦争開戦一周年を期しての昭和十七年十二月十二日の昭和天皇の神宮参拝を詠んだ「大君は神といまして、神ながらいのり給へり。今日の尊さ」や「大御祖（ミオヤ）　伊勢のみまへに、詳（ツバ）らかに　ことまをし給ふ　御心　おもほゆ」などの短

歌からも容易に察せられよう。[11] 戦時下の国家神道を支へた神職たちが、折口信夫の一連の「戦争歌」、とりわけ「神と天皇」を歌つた短歌に折口の「真意」を見たとしても決して不思議ではないのである。だが、折口が「神ながら神といまさず。今は」と詠ふ日が来ること、それは誰にも予想出来なかつた。それが国家神道の時代であつた。仮令、折口信夫だけがその日が来ることを知つてゐたとしても、その日までに折口信夫が「釋迢空」として数多くの「戦争歌」を作り、国民に「発表」したといふ事実は消えない。[12]

折口信夫は著名な歌人・学者として、『朝日』、『毎日』などの大新聞社が発行する新聞・週刊雑誌、あるいは改造社や日本評論社、中央公論社といつた著名な出版社が刊行する雑誌に短歌や論考を発表し、さらには社団法人日本放送協会の放送番組にも出演して短歌や文学を語ることも出来る人物であつた。そのやうな人物が戦時下に「神と天皇と民族」を詠ひ、詩にしたのである。

戦局がますます悪化した昭和十八年の秋、折口は学徒の出陣を「壮行歌」で送つた。その翌年の三月、折口は若者（及び国民）に向かつて、

おのれ先づ憂ひ、亦人に遅れて樂しむと謂つた見識は、海表の儒人すらも、常に持つた心意氣である。と共に叫び、衆の迎ふるに向かつて論ずることは、草莽の士のなすべきことではない。私どもの傳統する國學は、もつと心意氣の高い學問であり、學派であつた筈である。

己の命保證せられ、身を周る人々皆己を讃へるやうな言説は、少しく過激である方が、世の人に喜ばれるのが、常であつた。わが若き友よ。そんな心に住して、正しい學者は、事を論うては來なかつた。維新の志士は物言ひに、命をかけて居たのである。

正しい言説を推し出す激情は、詩として最美しい表現を取るに違ひない。さうすればこそ、あれほど、美と文學

とを否定しようとした篤胤も、其傾向の前輩なる春滿も、その成したものは、屡優れた詩を持つ歌であつた。だが、詩や文の爲に物せられた草茅危言は持たなかつたのである。今は、人を唆り、喜ばす小説や、詩を書いてゐる時ではない。すべての詩を否定して、又新なる詩を活かさねばならぬ時なのである。君たち、さうではないと言ふのか。

と「檄」を飛ばし、次いで「正しく聖旨によるものとして輝かしい來歴を誇」つてゐる「來米歌」に触れて一通りの解釈を施した後、

國に大難來る時、かくして堪へかくして凌ぎ却けよとの神の御念が、久米の子の聲をとほして顯れ出たものと思ふべきであらう。

草茅に擡言ぐる輩よ。人を叱り、世を糺す嘖も、神の嗟び聲ではある。併し今聞く如きは、あまり騒し過ぎはしないか。卿らの聲の中に、もつと古代人の慨みがこもつて居てくれ。一道の清く澄んだ悲しみがつきとほつてゐてくれ。さうは思はぬか。

と結ぶのである。[13] この「檄文」をどう評価しようと自由であるが、まるで静かなる扇動者のやうに「若者」に向かつて「古代人の慨み」の復活を説く歌人にして「国学者」は戦時中といへどもさうざらにゐるものではない。[14] 国家神道イデオロギーの基軸である「神と天皇と民族」を研究し、それを戦争歌に詠ひ上げ、多くの国民に向けて発信出来た折口信夫といふ人物。そのやうな人物を国家神道を批判した「草莽の歌人・学者」、などと呼ぶことは果して適切なのだらうか。「こんな國土がつた方面のある學問をして來たことが、どんなをりにも澁面つくつて思ひあがつたやうな事を言うてゐねばならぬ癖を、つけてしまひました。[15]」と折口信夫は折口春洋の身を案じつつ、疎開を勧める知人にその心境を吐露した。かう語る折口の「心境」、その戦時下の言動の奥底にある「心」を形作つたのは何だつたのか。

それは、「神と天皇と民族」を基軸とする国家神道そのものではなかつたのか。折口は国家神道を批判したのではなく、当の国家神道内部から己の理想とする「もう一つの国家神道」（古義神道・民族教！）を構築しようとしてゐたのではないのか。

「こんな國土がつた方面のある學問」をせざるを得なかつた時代に生きた折口信夫の姿を「戦争歌」を通して考へること、それは同時に「国家神道」とは何だつたのかを明らかにするための作業の一環ではあらう。最早、遅すぎた作業開始ではあるが、折口信夫の「併し、腹はしつかりして來ました」の言を噛み締めて拙い論を進めることにした。此の稿を認めよう、と思ひ立つた理由らしいものと言へば、実は、それ一つに帰するのである。

二　『天地に宣る』の同時代評価

折口信夫の『天地に宣る』は、昭和十七年九月に日本評論社から刊行されたもので[16]、支那事変が始まつた昭和十二年から昭和十六年十二月八日の大東亜戦争開始直後までの戦時体制下における「戦争詠」百八十首と詩三篇を収めた歌集である[17]。折口自らが「戦争歌集」と称してはゐるが、単に「戦意高揚歌」や「愛国歌」をぎつしりと詰め込んだ歌集といふわけでもない。無論、大東亜戦争開戦以降に編まれた「戦争歌集」であるから、中には戦意を掻き立て、愛国心を昂揚させるやうな勇ましい歌もあるが、折口信夫ならではのしみじみとした支那事変下での「戦争詠」もある。支那事変から大東亜戦争開戦までの足掛け七年に及ぶ戦時下での詠歌であるから、その時代の時勢の移ろひを映す折口なりの多様な戦争歌があるのは当然である。それ故に時代背景や折口の身辺事情を捨象して純然たる「作物」として評価・観賞することが頗る困難な厄介な歌集である。

この厄介な歌集の有する意義について同時代に逸早く論及したのが、歌集の製作にも関与した赤木健介[18]（明治四十年～平成元年）である。赤木は昭和十八年一月に記した「釋迢空論[19]」の中で『天地に宣る』の「追ひ書き」の全文を紹介した上で、「特に注目すべきことは、「國學の傳統正しい筋を襲ぎながら」といふ確信に溢れた言葉であつて、釋氏の二重人格の一面である折口博士の學者としての姿が、ここにはじめて短歌の世界にあらはれて來たことである。」と述べてゐる。赤木は、この歌集に国学者・折口信夫の「學問と藝術」が統一されて表現されてゐると見たのである（無論、後世的知見・見地からすれば、それは一種の「出来レース」であるかも知れないが[20]）。

赤木は、この歌集に収められた「旅にして聞くは　かそけし。五十戸の村　五人の戰死者を迎ふ」、「溜め肥えを野に搬つ生活　つく〳〵に歎きし人は、勇みつゝ死す」、「庭も狹に　食用菊を植ゑたるが、戰死者の家と　敎へられ來ぬ」など七首の歌[21]を掲げて「國民的挽歌として長く殘るものであ」り、形式的ではなく「しみじみとした内感に溢れてゐる」と高く評価してゐる。だが、それ以上に筆者が重要と思ふのは、赤木が、折口の「國學」は時局便乗的なものではない「眞の民族愛・國家愛」と「深い學問的探求の精神」に根差したものであると指摘し、「眞摯な學徒折口博士が、ここに面貌をあらはした」のが第三歌集たる『天地に宣る』であると評してゐることである。その短歌群の中で前記した短歌等七首の他に「秀作」として「大君は　神といまして、神ながら思ほしなげくことの　かしこさ」や「曉の霜にひゞきて、大みこゑ聞えしことを　世語りにせむ」、「いとほしきものを　いくさにやりて後、しみじみ知りぬ。深き　聖旨を」など九首を挙げてゐる。

赤木が「秀作」として挙げた短歌九首のうちいくつかの歌は戦後編まれた『遠やまひこ』（昭和二十三年三月）及び『倭をぐな』（昭和三十年）に収録されてゐるが、折口がその「追ひ書き」で「殊に、去年十二月八日、宣戰のみことのりの降つたをりの感激、せめてまう十年若くて、うけたまはらなかつたことの、くちをしいほど、心をどり

を覺え」て詠んだ筈の「大君は」と「暁の」の二首は「秀作」として戦後を生き延びることはなかつた。何故、赤木はこの歌を「秀作」として挙げたのであらうか。いくら赤木が「偽装転向」したとしても、「大君は　神といまして、神ながら思ほしなげくことの　かしこさ」を引用すれば十分なのであつて、「この嚴粛荘重な格調は、この歌集以後にも引きつづいて居るやうであつて」と述べ、『天地に宣る』刊行以後の「現つ神　わが大君は神力圓滿く具足ひて、なほいのります」、「大君は　神にしませば、天地の神の御軍を　引率ひ給ふ」（「蒼生も禱る」『週刊朝日』昭和十七年十二月二十七日号）などの天皇の「神格」に係る短歌をわざわざ引用する必要はなからう。まさか、当時の赤木として折口のこれらの歌に「人間ではない天皇、神そのもの」を見るほど知性と感性が鈍つてゐたとは思はれないが、赤木が「大君は」などの折口の歌を「秀作」として評価したのは事実である。それがたとへ赤木（及び折口？）の手の込んだ「偽装工作」であつたとしても、折口の「現つ神」に係る短歌を読んだ読者はゐるのであり、それをさらに「秀作」として推奨する赤木の読者もゐたこと、これも紛れのない事実である。敢へて強引に言ふならば、この「事実」の生じる所以・背景にあるのは、天皇を基軸としそれを唯一無二の思想的制度的根拠として日本に聳え立ち、覆ひ被さつてゐた国家神道（体制）であつた。[22]

この国家神道に対して折口は批判的であつた、とはよく謂はれることであり、それは今や定説のやうにもなつてゐる。[23] だが、それは戦後の折口の言動を無批判に戦時に投影させた論に過ぎないのであり、到底首肯出来るものではない。国家神道をどう定義し、概念規定するかといつた便宜的な議論は扨措き、国家神道と折口信夫との関はりを示すほんの一例を挙げておかう。折口に昭和十八年一月に発表した「億兆共に祈る」といふ三首からなる連作がある。「おごそかに　空より到る神いくさ　洋をとよもし、空よりいたる」、「この日ごろ　御思ひやすくおはすらし。わがすめ神も　たゝかひ給ふ」などが掲載されてゐる。これが掲載されたのは大日本神祇会といふ国家神道を上からも下から

も支へた日本最大の民間神祇団体の機関紙『皇國時報』の昭和十八年一月一日号である。そして前者の歌は昭和十七年の秋に流行した高木東六作曲の「空の神兵」を、後者のそれは同年十二月十二日の昭和天皇の神宮親拝[24]を、それぞれ題材として折口が詠んだものである。国家神道の謂はば全国的広報紙とも称すべき『皇國時報』紙上に、而もこのやうな「国家神道」以外の何物でもない短歌を掲載し得る立場にあつたのが当時の折口信夫だつたのである。かかる事実を考慮しない「折口国家神道批判者」説は無意味といふより、寧ろ敗戦に至るまでの折口信夫の誠実かつ韜晦な人格と生き方を見ようとしないだけでなく、折口の学問・文学・信仰からなる実践的活動の実態をも矮小化するものと言へよう。

そもそも、折口信夫は、彼一流の韜晦で言へば「枝蛙」として歌と学問に打ち込んだやうに振舞つてはゐたが、その実は歌人・学者でもある「殿様蛙」として国家神道体制の内部奥深くにも一貫して棲み続けてゐたのであつた（後述）。それを約めて言ふならば、神道の中核であるべき神社神道は「宮廷神道」に淵源してゐるのであり、神道人たる神職はそれを認識して、国家神道の構成要素となつてゐる官僚や「俄神道学者」らによる「新式神道」を排除して「宮廷神道」と「末流の神道」との一体化を目指さなければならない、といふ確乎たる信念（信仰）の故であつた。大正九年九月に國學院大學講師（専任）になつて以来昭和二十年八月の敗戦に至るまで、「國學の傳統正しい筋を襲」ぐ「國學者」を自任する折口は、この信念を事ある毎に「短歌と学問」を通して国家神道体制の内部から説き続けたのである。同時代人としての赤木健介が「釋迢空論」で、「「天地に宣る」は特に小部數しか刊行されなかつたから未讀の人も多かるべきを思うて、ここに全文を掲げた次第である。」と述べて「追ひ書き」の全文をわざわざ引用したのも、それは折口が国民に向けて発表した「戦争歌」が「單なる昂奮に墮したもの」でも「文學藝術としての價値に乏しいもの」でもなく、「高邁なる英氣と沈痛なる格調」を有してゐるものであることを、折口自身の言葉で語らせ

たかつたからに他ならない。

このことは、同時代人による数少ない『天地に宣る』についての感想である渡川功三といふ学生（?）の短い紹介文にも窺ふことが出来る。これは『國學院大學新聞』の昭和十七年十二月二十日号に掲載されたもので、そこで渡川は「前線短歌の性格はとにかく、國内の戦争歌は全く主觀化し、作者自身宛も戰場で活躍して居るかの如き感を抱かし、何となく物足らないものであつた。この秋歌壇の至寶折口先生の戰爭詠『天地に宣る』は歌こそ僅かであるが、われわれにおちつきを持たせる。」と述べて「追ひ書き」の末尾の文を紹介し、次いで「全く高古な沈痛な歌集で戰爭歌集中の一異彩であらう。國學の傳統をつがれる折口先生の澄み切つた心境は到底文章で書けるものでない。」として歌集所収の数首を挙げ、それによつて折口の心境を語らせてゐる。例へば、それは次のやうな歌である。

東の邃き思想を反くもの　今し　斷じて伐たざるべからず
父母に心を別きつゝ　告げがたき思ひを守りて、うれひけらしも
旅にして聞くは　かそけし。五十戸の村五人の戰死者を迎ふ
物部の家の子どもは、親をすら　かくはげまして　いくさに死にき

この渡川功三なる人物について筆者は知るところは何もないが、少なくとも『天地に宣る』刊行当時においてその「追ひ書き」に籠められた折口信夫の心境をその「戰争歌」と突き合はせて読み取らうとした者もゐたことだけは確かである。このやうに、『天地に宣る』に収録された折口の「戰争短歌」の一つひとつを「追ひ書き」と重ねつつ読んだ読者もゐたのである。赤木が引用した前記『週刊朝日』に掲載された歌も、仮令、折口が評価しない万葉歌人・柿本人麻呂を気取つた不本意なものであつたとしても、[25] 戰時下における国家神道体制での折口信夫の戰争歌が果たした役割とその影響を問ふことなしに、折口の「国家神道批判」も戰後の「神道宗教論」も軽々に論ずることは出来な

いのである。

三　『天地に宣る』の「追ひ書き」

昭和五年に『春のことぶれ』を出して以来、久しく歌集のなかつた折口信夫が久々に出した歌集が『天地に宣る』であつた。この歌集が満を持して出版されたものかどうかは兎も角として、『春のことぶれ』の「序」に比較すれば分かり易い「追ひ書き」があることによつて、この本を手にした読者はその刊行の趣旨・内容の大意は掴めたであらうことは既に見た通りである。この「追ひ書き」には、折口の本音（らしきもの）、謂はば戦争に関する折口の千々の想ひが語られてゐると考へるのが自然と思はれるので、以下全文を引用して段落毎に番号を附して、ごく大雑把な感想めいたことを記しておく。

①先年、ともかくも本にした「春のことぶれ」以後十三年、その間の作品集のまとまらぬ間に、ひよつくりと、こんな歌集を出すことになつた。

②私自身、とても一冊になるだけの分量はない、と考へて居た戦争歌集であるが、その氣でかゝつて見ると、少々みすぼらしいが、やつと體裁の整ふだけの、作りおきがあつた。

③殊に、去年十二月八日、宣戰の　みことのりの降つたをりの感激、せめてまう十年若くて、うけたまはらなかつたことの、くちをしいほど、心をどりを覺えた。けれども、その日直に、十首近く口にのつて作物が出來、その後も、日を隔てゝ幾首づゝ、何だか撞き上げるものゝあるやうに、出來たのである。此は、若い頃の記憶を外にしては、幾年にもないことであつた。

④中には、感覺のこはゞつたのや、類型を出ないものもあるが、此等の即興に近い作物があつたので、少分ながら、この集も出來た訣である。

⑤私どもは恥しながら、今まで、憂國の士のやうな、美しい詞を吐くをりを逸して居た。其で居て、老いに近づいたこの年になつて、尚、國土や、軍團に對して、かくの如く愛と、念慮とを懸けて居たことを知ることが出來た。自身の表現によつて、自身敎へられた訣である。國學の傳統正しい筋を襲ぎながら、空しく老い朽ちようとする私ではあるが、心は、虛しく消えようとして居たのでないことを覺えて、さすがに、さしぐむほどの歡びを感じる。

⑥唯、私の多くの老いた、若い友人が、戰陣に趣いて、色々の思ひを、私にさそふ機會に値うた。

⑦中には、たふとく命過ぎた人もあつて、人間としての悲しみの、禁め難いものがある。此は、日本人相共に持つ悲しみであるから、誰も咎めてくれぬやうに。又、さう言ふ心を根柢から振ひ起こすやうに、輝き滿ちた顏や、詞を以て、私の前に、勝ちの消息を寄せてくれる人々が多い。私は、たゞ歡喜と言ふより、もつと底深いおちついた、澄みきつた心を以て、其人及び消息に、次々に接して居る。だから、この感謝を多くの人々に捧げるに先つて、まづこれ等知りあひにおくりたい、と思ふ。此本をまとめよう、と思ひ立つた理由らしいものと言へば、實は、それ一つに歸するやうである。（『天地に宣る』、一八九頁～一九二頁）

いかにも折口らしい韜晦と難渋で滿ち滿ちた口調であるが、言はんとすることはかなり明瞭に見て取れる。しかし段落①に関して言ふならば、この『天地に宣る』を手にした読者のどれだけが、「その間の作品集のまとまらぬ間に、ひよつくりと、こんな歌集を出すことになつた」折口の抱へる諸々の事情を理解することが出来たであらうか、といふ疑問は残る。ある者は「去年十二月八日、宣戰の　みことのりの降つたをりの感激」に折口の心意を見たであらう

し、またある者は「私どもは恥かしながら」以下の段落に真の「國學者」の姿を想つたかも知れない。さらには、戦場での悲惨と栄光を「もつと底深いおちついた、澄みきつた心」で思ひ遣ることの大切さをしみじみと感じた読者もあつたらう。「ひよつくりと」出来た歌集であつても、読者にしてみれば同時代の戦時を生きる歌人の「戦争歌集」なのであり、それは作者の意図や思ひを遥かに超えて一人ひとりの読者の受け止め方（観賞）に委ねられる運命にあつた。

②に関しては、『短歌研究』など種々の雑誌、新聞等に発表した「戦争歌」が相当数あるのは確かであり、取り立てて問題はない。③に関しては、折口同様に「宣戦の大詔」が渙発された感激を詠つた歌人が多数ゐたのであり、別段特異なことでもない。重要なのは、天皇が「神といまして神ながら」に渙発した「宣戦の大詔」に籠められた天皇の苦悩と苦汁の決断を折口が読み取つてゐることであり、それが昭和十七年五月十一日付けの『皇國時報』紙上に初めて公表されたといふ事実である。これ以前の折口の「戦争歌」は、折口にとつては所詮「人と人との戦ひ」ではあつても、「神（及び天皇）と人とが協力しての戦ひ」ではなかつた。それが現実のものとなつたのである。その間の折口の心と身辺の移ろひは昭和十八年七月の「戦ふ歌」[26]が如実に物語つてゐるが、この経緯については後ほど改めて述べることにする。④については、赤木健介が「ただ、氏も「追ひ書き」で言つて居られる通りに、「感覚のこはゞつたものや、類型を出ないもの」も確かにある。殊に、二三、自身を實戦の境地にありと假定して作つたものは、氏の敍事詩的傾向のあらはれと見るべきであるが、效果は乏しく、車輪の空廻りに似た感じのものもある。」と指摘してゐる。[27]

⑤には、これまた折口特有の韜晦が含まれてゐるが、「現代版萬葉びと」の面目躍如たる折口の心境が滲み出てゐる一文であり、後に多少詳しく触れる「萬葉集に現れた征戦の歌」[28]に直接関係するものである。⑥⑦は折口ならずと

も戦地に肉親・友人・知人等を送つた多くの人々に共通する思ひであるが、それを折口ならではの短歌や詩、そして小文に仕立て上げようとするところに戦時下の折口の「もつと底深いおちついた、澄みきつた心」が認められる。それを具体的に示してゐるのが、昭和十八年五月八日の朝日新聞に掲載された「戰ひに死ぬものゝふの歌」[29]であり、そこには折口がこの段落で記した思ひが具体的にしみじみと語られてゐる。

以上、「追ひ書き」の各段落毎に『天地に宣る』刊行に係る折口の思ひ（想ひ）やその背景について頗る簡単に触れてみたが、それを約めて言ふならば、折口信夫にとつての「戦争歌」のみならず戦争そのものの画期が昭和十二年の支那事変と昭和十六年十二月八日の大東亜戦争開戦であつたことは間違ひなからう（これは同時代を生きた国民すべてに共有される実感でもあつたらう）。今少し折口に即して敷衍するならば、次のやうに言へよう。即ち、折口にとつての戦争は、昭和六年の満洲事変から十二年の支那事変に至るまでの間は「萬葉人の戰ひ」を想像の世界で描けた時代であり、支那事変の「勃発」は戦争を身近に感じた時代であつた。しかし、大東亜戦争の「勃発」は支那事変の単なる量的な延長・拡大ではなく、「神と天皇と民族」が協力して戦ふといふ質的に全く異なる戦ひに転化したのであり、正しく「萬葉人」の戦ひが現代の万葉人としての折口信夫の戦ひとなつて現前したのである。要は、それを短歌で表現するか、それとも「論」で表現するかが折口にとつての問題なのであつた。

四　折口「戦争歌」の思想的背景

昭和六年九月、満洲事変が「勃発」した。当初の不拡大方針は早くも十一月には崩壊し、翌昭和七年二月には関東軍がハルビンを占領、次いで三月一日には「満洲国」が独立し、後の皇帝溥儀が執政に就任した。この間、事変での

戦死者も続出し、戦争は決して社会とは無縁の遠い世界のものではなくなつてゐた。かかる時勢に一国民として生きてゐた折口信夫が書いたのが「萬葉集に現れた征戰の歌」である。『大阪朝日新聞』の昭和七年三月十五日・十六日付け号に掲載されたこの小文で、折口は、山上憶良の壬申の乱を歌つた長歌を引用しつつ、

戰爭は、神と人と、更に國々の守護靈との、協力しての爭ひであつた。戰場における一番名告りと稱すべきものは、非常な美辭を連ねて、名のりをあげる習はしを、後々にまでも傳へたものであつた。それが轉じて一方文學化した敍述となると、かうした形を採つてくる訣である。だが、萬葉人といへども、戰爭の渦まきに入るまでの心には、哀愁と不安と焦燥があつた。またそれがあればこそ、單に戰ひを好んだばかりでなく、やがて美しい日本國を確立して行くはずの、さうして既に、賑はうた村の中の樂しい生活を知つてゐた人々などの、進んだ情意を思はせる。

と、万葉の昔に託してその「戰爭觀」を述べてゐる。だが、折口は単なる自己の「戰爭觀」披露には止まつてはゐなかつた。折口はこの小文の結論として、現実に遂行されつつある戰爭も「神と人と、更に國々の守護靈との、協力しての爭ひ」であることをも語つてゐるのである。即ち、

戰爭は、民族の大行事である。萬葉びとの信仰からすれば、一つの儀禮でさへあつた。啻に宮廷の御意思のみによつて、行はせられることではなかつた。今もまた我々自身、その責任は分擔せなければならぬ。宇合の場合に、陛下は、神および御自身の御意思として勞つてゐられる。

食國の遠の御門に、汝らが斯くまかりなば、平けく我は遊ばむ。拱きて我はいまさむ。すめらわが珍のみ手もちかき撫でぞ犒ぎ給ふ。うち撫でぞ犒ぎ給ふ。還らむ日　相呑まむ酒ぞ。この豐酒は（巻六、九七三）

反歌

　ますら雄の行くとふ道ぞ。おほろかに思ひて行くな。ますら雄の伴（同、九七四）

この時の天子は、聖武天皇でいらせられる。天子は神事にあづかせられ、その外の業は、人にあづけて執行せしめられる。それで戰爭の大事に向ふ節度使に對して、また此酒を呑んで犒ふことを條件として、御委託なされたお歌である。反歌は、軍陣が、健康な壯夫の行き向ふべき道だ、といふことを諭してゐられるのだ。此御製、一説に、元正天皇の御作とも傳へられてゐる。

と。敢へて結論的に言ふならば、ここには折口信夫が戦争を実感せざるを得なくなつた戦時下の、取り分けて昭和十六年十二月八日以降の大東亜戦争下での思想と行動の「短歌表現」が先取り的に暗示されてゐる。『天地に宣る』冒頭の「大君は　神といまして、神ながら思ほしなげくことの　かしこさ」といふ一首、あるいは後述する昭和十八年四月の靖國神社招魂式・臨時大祭に際して詠んだ「大君は　神にしませば、ますら雄の魂をよばひて　神としたまふ」といふ一首、延いては戦時中の多くの「神と大君（天皇）と伴のますら雄」を詠つた一連の短歌の思想的意味を問ふことと、折口「戦争歌」から折口信夫の「ヒューマニズム」を読み取らうとすることとは同義ではない。独り密やかに草蔭で「今もまた我々自身、その責任は分擔せなければならぬ」と折口は呟いたわけではない。

　折口の「萬葉集に現れた征戰の歌」が掲載されたのは、昭和七年三月十五日・十六日付けの『大阪朝日新聞』といふ国内屈指の大新聞の紙上においてであつた。この三日前の三月十二日、同紙は「東京特電」として「英霊を祀る　聖上畏くも臨御　来月廿五日より四日間　靖國神社の臨時大祭」の見出しで前日に内定したばかりの「今回ノ事變」（満洲事変）等での死歿者（五百三十一名）の靖國神社合祀を逸早く報じてゐた。同紙が四月二十五日からの靖國神社臨時大祭執行の事前情報入手をうけて（「官報」での陸軍省・海軍省告示は三月二十六日付けの第一五六七号においてであつた）、折口に急遽「萬葉集に現れた征戰の歌」の寄稿を依頼したのかどうかについて筆者には不明であるが、

折口が『朝日新聞』、特に大阪のそれとは明治末年以来の馴染みの新聞であることを考慮するならば、前以て寄稿を依頼しておいてその掲載の時期を見計らつてゐたことも考へられる。[30] いづれにせよ、昭和三年の「済南事変（事件）」（昭和四年に戦歿者一三一名を合祀）とは質的にも量的にも比較にならないのが満洲事変だつたのであり、折口にとつての「戦争」はこの一文から始まつたと言へよう。

折口がこの小文を発表してから一年が経過した昭和八年春までの一年間で満洲事変での戦死者は一段と増加し、その年春の靖國神社臨時大祭での合祀者は約千七百名に達してゐた。「戦争」は確実に短歌の世界にも深い影を落とし、生々しい短歌の題材になりつつあつた。『婦人公論』短歌欄の選者であつた折口も、同誌の昭和八年三月号で「試みに、選歌壇の為に、課題を設けて見たい」として「戦争」「戦時」を題詠とすることを予告して投稿を募るやうな状況が到来してゐたのである。折口は、投稿歌の選評を同誌五月号に掲載し、そこで「殘念ながら、戰爭を心に實感として持つことの出來た人が、尠なかつた樣だ。」と述べ、「民族的の感激・民族的な心うごき」を持つて「戦争歌」は作るべき、と主張してゐる。[31] 万葉の時代のみならず、現代の戦争においても「今もまた我々自身、その責任は分擔せなければならぬ」との信念・確信からの言であらうが、ならば、折口自身の「戦争歌」はどうなのか。この信念から生まれた折口の「戦争歌」も当然「正的な、又歪的な表現をとつて出て來る」ものであつた筈である。だからこそ、昭和八年の時点よりも遥かに深刻な「戦時」の到来を予感させる昭和十二年二月の「二・二六事件」、さらには大本営が設置されて現実の「戦時」となつた支那事変においては、折口は最早「戰爭の渦まきに入るまでの心」ではなく、既に「渦まきに入つた心」には一層の「哀愁と不安と焦燥」があることを兵士や戦死者の遺族の姿と自己の心境をも重ね合はせて、彼なりの「戦争歌」を詠ふことが出来たのである。

支那事変が終息しないまま推移した十一月の末、信州・諏訪に旅した折口はそこかしこに「戦争と生活」の影を認

めつつも、それを「冬の葉」として詠ふ幾許かの余裕はあつた。それ故、そこに収められた「戦争歌」の多くが哀愁を帯びてゐるのも折口にとつては自然なことであつたし、他方で「はずみつゝ語らふ人を　憎み居り。この戦ひに人多く死す」といふ義憤の気持を発露させることにも躊躇はなかつたのである。[32] 戦争に際しての「哀愁と不安と焦燥」は、戦死者を出した遺族はもちろんのこと、出征兵士を送り出した家族や知友など多くの国民に共通するものであつたし、折口自身にも無縁の感情では有り得なかつた。折口信夫だけが戦争が生み出す「哀愁と不安と焦燥」を以て「戦争歌」を詠んだわけではないし、折口は「同じ民族の多くの若い靈が、此ほど戦つてゐる」ことを多くの「歌びと」が短歌で表現することを望んでゐただけのことである。折口が歌に託した想ひを忖度して折口の時勢への「抵抗・反戦」傾向を評価することよりも、「單に戰ひを好んだばかりでなく、やがて美しい日本國を確立して行く」民族（国民）の一員としての歌を折口は追求し、実践したその軌跡を丹念に辿ることの方がより重要であらう。要は、まづは『天地に宣る』の歌と「追ひ書き」を当時の折口の心境・真意として虚心坦懐に読めば良いだけの話である。以上述べて来たやうに、『天地に宣る』刊行に至るまでの折口信夫の「戦争歌」だけを特別視する必要はない。「要するに、この人の學問も藝術も、つまるところは、より深く人間を理解し、人間を愛せんとする心情に根ざしてゐるのである。」と喝破した同時代人としての井手文雄の評価で足りるのである。[33]

しかしながら、それは「宣戦の大詔」までの評価であることに十分な留意が必要である。それ以降の折口にとつての戦争とは「人と人」との戦ひではなく、「人と神」とが協力しての戦ひへと移行したからである。人であつて神である大君（天皇）が、国民（民族）に開戦の「神の御言」を宣り下すことによつて、初めて神と天皇と民族が協力しての真の戦争になると折口は考へてゐたのであつた。「天地に響きとほりて　甚大なる　神の御言を　くだし給へり」の一首はその折りの「感激」の短歌表現・所産であり、この述懐は決して誇張ではないだらう。それは長年の間、天

皇とは何なのか、を神と人間との関係において「文献と民俗調査」から追ひ求めて来た折口だからこそ詠へた短歌である。この一点こそが、折口信夫の大東亜戦争下における「戦争歌」と他の歌人たちのそれとを質的に区別する決定的な相違であり、折口信夫にしか作り得ない短歌の源泉なのであつた。[34] そして尚言ふならば、その決定的一点があつたからこそ、折口は国家神道と必然的に関はらざるを得なかつたのである。

五　折口信夫と神社界

折口信夫と国家神道との関係を考へる上で参考になるのが前に引用した赤木健介の「釋迢空論」である。赤木健介は折口信夫の経歴について次のやうに記してゐる。即ち、「釋迢空氏は明治二十年生れで、郷國は岡山縣の或る村であつたやうに聞いてゐるが、少年時代は、大阪で過されたのである。大阪の今宮中學を出られて（その同窓に近藤信竹提督や脇坂部隊長があつたことは歌集「天地に宣る」の或る歌によつて知られる。）國學院大學に學ばれた。この一般人には縁遠い學校に對して、氏は偸（ママ）らぬ愛着を持つて居られるやうである。」、と。[35] 聊か杜撰な記述があるのも却つて赤木と折口との関係を示してゐて興味深いが、それよりも注目すべきは、折口の天王寺中学時代の同窓に海軍中将（後、大将）の近藤信竹や陸軍少将の脇坂次郎がゐることを特記し、さらには折口が「一般人には縁遠い」國學院大學の出身であり、その國學院に折口が「渝らぬ愛着」を持つてゐるやうだと記してゐることである。

赤木がいふやうに、『天地に宣る』には「同期生のうち、近藤・脇坂等、軍務に從へる者多し」と記してあり、さらには前記「戦ひに死ぬもの、ふの歌」でも「世間狭い私も、知りびとに多くの軍人がある。その中には、私など、はすつかり懸け離れた位置にゐる舊友もある。だがもつと近しい幾人かもあつて、心易い「われおれ」のつきあひを

してゐる。」と語つてゐる。これを何気なく読み飛ばせば単なる己の友達自慢にしか過ぎないだらうが、折口にとつては親しい友人・知己の存在が「戦争歌」の題材にもなつてゐることに注意すべきであり、ここに折口信夫といふ人物の一側面を垣間見ることも出来よう（余談ではあるが、終戦間際の栗原悦蔵海軍少将を「一介の武弁」、「報道少将」と蔑んで歌にし得たのもかかる友人・旧友が存在してゐたからであらうことは想像に難くない[36]）。しかし、それ以上に折口信夫と国家神道との関係を考へる上で重要なことは、赤木が記してゐるやうに折口が國學院の出身であり、その國學院に愛着を有してゐたといふことである。折口が國學院への変らぬ愛着を抱いてゐたといふ赤木の「証言」は、皇典講究所・國學院大學を媒介とする折口信夫と国家神道との関係を論じるに際しては重要な示唆となり得る。

そもそも、折口がその「古代研究」を一学者として本格的に世に問うたのは大正九年五月の『國學院雑誌』の「妣が國へ・常世へ」であり、現実の「神道・国学」の在り方に対する批判の第一弾である「異譯國學ひとり案内」が発表された媒体も同年の『國學院雑誌』紙上においてであつた。以後、大正から昭和初期にかけての一連の「古代研究」の主要な論考は『國學院雑誌』に掲載されたのであり、その他も『皇國』や『神道學雑誌』、『神社協會雑誌』といつた神社界に関係の深い雑誌を媒体として発表されたものである。これらの雑誌類が国家神道を支へる有力な媒体であることはいふまでない。勿論、これらの雑誌等には多種多様な学者・研究者が論考を寄せてゐるのであり、何も折口だけが特別であつたわけではない。だが、それらの多くの学者たちは極論するならば、謂はば研究のための研究を「研究成果」として発表してゐたのであり、「或る目的」を持つて研究し、それを学術雑誌や神道関係の雑誌に発表してゐたわけではない（例外として、筧克彦や加藤玄智がゐたが）。折口の研究にはこれらの学者とは違つて、明らかに「或る目的」があつたのであり、しかも「文学」としての短歌表現にもその目的が籠められてゐたのである[37]。その背景には、赤木が指摘した「一般人には縁遠い學校」としての國學院といふ特殊な大学の出身であり、教授といふ立場があ

つた。これなくして折口と神社神道（「狭義」の国家神道？）との接点は有り得なかつたのであり、折口はその接点を戦前・戦中・戦後を通じて一貫して保持し続けたのである。

折口信夫は明治四十三年に國學院大學大学部国文科を卒業してゐる。同期卒業者の中には国史科の秋岡保治、宮川宗徳、師範部国語漢文科の高階研一がをり、一期上には折口の刎頚の友ともいふべき氷室昭長、そして外島瀏がゐた。[38]いづれもその後は国家神道下の神社界の指導的位置を占めるやうになる人物であり、折口の謂ふ「新式神道」・「官廳神道」たる国家神道への関与も彼らとの人的関係を抜きにしては語れない。全国の一万五千に上る神職を結集した全国神職会（後の大日本神祇会）の機関誌『皇國』の大正十一年二月号に折口は「現行諸神道の史的價値（其の一）」を寄稿し、「神の道徳と人の道徳とを常識一遍で律しようとする」官吏や学者による「新式神道」とそれに甘んじてゐる神職を痛烈に批判した。当時の全国神職会の常務幹事は秋岡保治であり（幹事の一人に河野省三もゐた）、『皇國』の編輯者は『皇典講究所五十年史』の編纂にも従事した照本亶[39]であつた。照本は「折口先生の「現行諸神道の史的價値」は氏の豐富な學的研究から然も鋭利な觀察とを以て然も皮肉的に現在の神道（神社）に對して批判を加へられて居るもので其の本論は次號に掲載さるゝのであります。」と「編輯を了つて」で記してゐる

結果的には「本論は次號に掲載」されることなく終はつた折口の「新式神道」批判ではあつたが、それでも「此の道に關しては、均しく一票を投ずる權利を持つた神職で居て、學殖が淺く、信念の動き易い處から、こんな連判のなかま入りをしたとあつては、父祖は固より、第一「神」に對して申し訣が立たない次第である。大本敎ばかりも嗤はれまい。なまなかな宗敎の形式を採つたが爲に、袋叩きの様なめを見た右の宗旨も、皆さん方の居廻りにある合理風な新式神道と、變つた處はあまりないのである。」とまで啖呵を切れるのが折口であつた。それは、河野省三の「国民道徳的神道論」を批判した大正九年の晦渋な「異譯國學ひとり案内[40]」とは比べ物にならないほどの「現行の官僚神

道・道徳神道」への正面からの直接的かつ十分に過激な「紙爆弾」の効果を持ち得たのである（この背後には当時の国家神道の「揺れ」が存在するのであり、戦時下の国家神道とは同列に論じられないことに注意すべきである）。[41]

この『皇國』での発言を機に、折口はその信念・信条とする神道論―天皇（宮廷）と神道との相関関係論―を「學殖が淺く、信念の動き易い」神職（神社界）に注入し、浸透・普及させる活動に着手したのである。昭和天皇の即位・大嘗祭を実践的（実戦的！？）契機とする大正末期から昭和初年にかけて続々と発表された折口の所謂天皇論・神道論は、万葉集や記紀以下の文献研究と琉球をも含む全国各地の民俗調査によつて行きつ戻りつしながら形成されたものであるが、その一応の成果発表が『古代研究』であつたことはいふまでもない。その『古代研究　第一部　民俗學篇』（昭和四年四月、大岡山書店）に「現行諸神道の史的價値」が「神道の史的價値」と改題されて収録されてゐる。一見、他の論考と異質なもののやうにも感じられるが、それは読者、殊に神職に「世間通になる前に、まづ學者となつて頂きたい。父、祖父が、一郷の知識であつた時代を再現する」ことを願つてのことからであつたらう。

この折口の願ひを実現するためには、折口自身が「学者」としてその調査・研究を研ぎ澄まして、「自分の肩書きや、後押しの力を負うて、宣傳又宣傳で、どしどしと羽をのして行く」学者の・天皇論に実戦的に対処していかねばならない。それを示してゐるのが前記したやうに、『國學院雑誌』はもちろんのこと、田中義能の『神道學雑誌』や官僚神道の広報機関誌『神社協會雑誌』、さらには内務省神社局官員の発案・編輯になる『神道講座』などの出版物に公表された韜晦と自信（過剰？）に満ちた種々の天皇論・神道論である。中でも、昭和四年十一月に四海書房から刊行された『神道講座』第二冊に掲載された「民間信仰と神社と」は発表媒体の重要性もさることながら、[42] 折口の戦前期を通じての一貫した神道論の核心が述べられてゐるもので、戦後の天皇論・神道論を考へる上でも無視できない重要な論考である。以下、重要と思慮する箇所を抄出しておく（傍線は引用者）。

私などは經歴上、神道に關係深いやうに見え乍ら、實は全くの門外漢である。故に其批評は極めて謙遜であるが、情熱的で、同時に私同様、神道の未來を期待する多くの國民から、神道家に向つて發する要求の聲だ、と考へることも出來よう。私どものこの話の立脚地とする處は、われ〳〵祖先の古代生活における信仰で、その間に横はる古義神道から、今の神社神道が順調に伸びて來たか否かゞ、問題の焦點になること、考へる。

概念的に言うても、われ〳〵の親しい神道家、殊に、神社に交渉深い方面では、きつと雙手を擧げて贊成せられ、不贊成を稱へられる筈のない合致點のあることが豫期出來る。それは、今日以後の神道が、必、現行の宮廷の神道を基礎とし、典型として進まなければならないことであり、又、さうすることに依つて、神道の存在の價値も、新時代に向つて、明らかになつて行くだらうと言ふことである。（以上、「一　神道における宮廷信仰の位置」）

話が多岐に亘りさうで、萬一、讀者諸氏のうちに、私の主眼とするところを取り違へる方がないとも限らぬから、こゝで結論を、端的に示しておきたいと思ふ。官廳の考へてゐる神道では、やゝもすれば拒外せられ易い民間信仰、或は地方の神社の儀禮が、意外にも、宮廷神道のうちに存してゐる事實の多いのは、實際驚くべき事であると同時に、われ〳〵國民として、民衆生活に、深い意味と、喜びとを感じるのである。かの民間の信仰なるがために、或は地方の神社の行事なるがためにといふ理由の下に、それを無反省に低く見、末流的なもの或は、後世加つたものとする從來の考へ方は、どうかと思ふ。この事は、現に宮内省の掌典部に奉仕してゐる親しい人々のうちにも、唱導してゐる人のある位で、即、われ〳〵の神道は、われ〳〵の時代に適當であるよりも、まづわれ〳〵の祖先の古代生活に順應したものであり、古代の信仰そのものでなければならない。そして、現代の信仰に合致し、現代の倫理運動に都合がよいから、そこに價値があるとする考へ方は、神道を毒するものではなから

うか。

私は以下において、事實歴史的に見ても、或は、民俗學的に見ても、宮廷の神道が、地方に撒布せられ、それが時經るに從うて、分化を起し、變形をなしたことを申したいと思ふ。（以上、「二　古代における宮廷神道の風化」）

いづれにしても、神社神道の歴史は、かなり長いけれども、明治における神社のみを基礎とした神道観なるものは、起源のわりに新しいものといふことが出来る。我々は、神社以前の神道の形を考へ得るが為に、さうしてそれが、宮廷神道及び、民間信仰の間に、俤を止めてゐることを知ることが出来るが為に、単に神社神道を以て、神道窮極のものと考へるわけには行かないのである。それほど、古義神道には、深い内容があり、強い情熱があつたのである。

而も今さへ、神社神道以外に、古くから変化尠い形のまゝで伝つてゐる民間信仰が、所謂神道家の考へるよりも、多く存してゐる。今日の神社神道を根本とした神道も、之を摂取することに依つて、また新な時代信仰として、大いに興るに違ひない。こゝに、神道の未来に対して豊かな期待を持つてゐる。（以上、「四　神社神道の推移」）

以上、長い引用となつたが、冒頭部分の「一　神道における宮廷信仰の位置」では韜晦に秘められた折口の「古義神道」実現への並々ならぬ決意と自信が語られてゐる。傍線を附した箇所では、その「古義神道」を現代に復興すべく、「宮廷神道」と「民間信仰」を加味した神道の中核たるべき神社神道の必要性が執拗に説かれてゐる。「官廳」と「俄神道学者」が主導する神道論に左右されてゐる（と折口が思慮する）全国各地の「土着の神主」に向けての折口信夫の神道論の真髄がここには語られてゐるのである。それは、観念論としての神社神道批判でもなければ、況や傍

観者的な立場からする国家神道批判でもない。折口が目指した神道は、宮廷神道と神社神道、そして民間信仰が融合した神道であり、それこそが本来的な意味での折口にとつての「国家神道（民族神道）」であつた。その形成の中核としての神社神道、それを担ふ主体である神職の奮起を促した「檄文」こそ「民間信仰と神社神道と」なのであつた。大正後期のこの「現行諸神道の史的價値」、昭和初期のこの「民間信仰と神社神道と」、そして昭和十六年九月の皇典講究所華北総署での講演「古代人の信仰」、これらに一貫する折口の天皇論・神道論がやがて「短歌表現」として神職のみならず広く国民に向けて発信されるやうになるのである。

六　『皇國時報』の読者と折口信夫

昭和五年四月に刊行された大塚虎雄の『學界新風景』[43]の「國文學の明日」で「新人折口信夫氏」と紹介された折口信夫・釋迢空も十年後の「皇紀二千六百年」を迎へた昭和十五年には今や押しも押されぬ国文学者・民俗学者、そして歌人・釋迢空として最早「草かげ」には棲めない立ち位置にあつた。当時、折口信夫の神社界での友人・高階研一は全国神職会の理事と皇典講究所の理事をしてをり、翌昭和十六年三月には開設されたばかりの北京の皇典講究所華北總署の初代署長に就任してゐる。高階との関係もあつて、折口は九月に開催される華北総署主催の「皇道講座」の講師の一人として招聘されることになり、初めての中華民国訪問が実現することになつた[44]。折口は北京での華北總署主催の「皇道講座」で現地の神職や皇典講究所関係者を前にして「古代人の信仰」と題して三日間連続の長い講義を行つてゐるが、この講義においても予てからの持論である「神道宮廷発生説」を詳細に説いてゐる。皇典講究所が経営する國學院大學の教授であり、その常任商議員をも務め、なほかつ全国神職会の指導的地位にある神職を友人・知

友に持つ折口信夫。そればかりでなく慶應義塾の教授でもあり、釋迢空といふ名を持つ無所属の大歌人でもある人物。その人物が昭和十七年五月、国家神道の一翼を担ふ大日本神祇会の機関紙『皇國時報』の歌壇の選者に就任することになつたのである。

昭和十七年五月付けの『皇國時報』には新たに同紙「皇國歌壇」の選者に就任した「釋迢空」名の「選者の言葉」が掲載されてゐる（併せて「感激」と題する題詠に応募して選ばれた桑原廉一郎など二十六名の歌も載つてゐる）。まづは、折口の『皇國時報』の歌壇選者としての意気込みを示す「選者の言葉」を引いておかう。

神道ならびに短歌

今後ある期間、皇國時報の短歌一切について、責任を持つて、關與することにした。實は其ほどのり出す必要もない様に思ふが、するからなら、皇國時報から、無意味な遊戯三昧の歌をとり去るのが、意味ある爲事だと思ふからである。ひいては、たとひ一部でも神道と短歌の上に、意味のある美しい文學を將來したいと思ふからである。

まづ今度の作物は、非常によい出來ばへを示してゐる。此なら何とか、よい方へ伸びて行くだらうと期待をかけてゐる。

ちよつと見にはつまらぬものゝ様でも、中にはよい種子を包藏してゐるものをとり立てゝ、よい完成をするやうに、及ばず乍ら御加勢するつもりである。

まづ此が最初に申しあげる一言。（釋迢空）

「實は其ほどのり出す必要もない様に思ふが」とは、如何にも折口らしいが、それは折口が「遠慮」する必要のない「舞台」であつたからであらう。『婦人公論』や『短歌研究』の選者を務めた釈迢空・折口信夫であるからして、『皇

國時報』が如き「神主」相手の旬刊紙の歌壇選者など務めたくなかつただらうし、務める必要を毫も感じなかつたとしても当然かも知れないが、矢張り折口一流の「韜晦の裏返し」であらう。だが、それにしても、引き受けるからには「皇國時報の短歌一切について、責任を持つて、關與」し、「皇國時報から、無意味な遊戯三昧の歌をとり去る」といふのは聊か穏当さに欠ける。単なる啖呵ならご愛敬であるが、折口はこれを実践するのである。今までのやうに鳥野幸次[45]が選者を務め、鳥野が選んだ歌で満足してゐるやうな為体の神主の集合体ではこの非常時の試練を乗り切ることはできない、との気慨と決意からであらう。

かくして、短歌による折口の神主教育が始まつたのであり、以後、『皇國時報』の紙面からは「無意味な遊戯三昧の歌」は一切姿を消すことになる。これも折口の気慨の或る側面と判じて何ら不都合もない。「時代のうごきにさとく、必要な時にするどい批判精神を発する学者・歌人[46]」だけではなく、実際に行動する学者・歌人であることを折口は決して拒んではゐない。「孤独な草莽人」と決めつける必要はどこにもないのである。

少しく端折つていふならば、要するに、折口は国家神道（神社神道）の民間の牙城たる大日本神祇会の構成員に向けて「短歌」といふ武器を通して、自己の抱く神道と天皇との関係如何を訴へようと行動したのである。「大君は」の歌も、かかる背景があつて公表されたのであり、同じ号に掲載され始めた「禊の話」ともども国家神道の中枢部に投じられた折口流「国家神道改造論」の一環であつた。では、その改造を担ふ主体は誰か。折口にとつては、それは「神職神道家」及び「神道の本家みたいな所」たる國學院の研究者以外には有り得なかつた。「禊の話」の中で折口は、「神道といふものは、まう少し變つた方法で、神道の内部の者が研究して行かなければ嘘なんであります。今までの遣り方では新しい學問が出て來る毎に、神道の形が歪められて行かなければならぬのであります。」と、折口は神職に向かつて訴へるのであるが、それは自己自身への鼓舞であり、また母校たる國學院に籍を置く「神道学者」として

の自覚と使命感の表出でもあつたのだらう。皇典講究所・國學院大學を含む神社界こそが折口にとつてのロードス島であつたのであり、神社界も当然の如く折口を自分たちの「同志」と認識してゐたのである。

だからこそ、折口は神社界の「公器」たる『皇國時報』紙上に編輯部の依頼で「折口信夫」名の「禊の話」の掲載を許可したのであらう。[47] そこでは「結局世の中に有力な生活をしてゐる人といふ者は神道でなくてもいゝのでせう。禪でもいゝのでせう。何でもいゝのですから、唯其の時々によつて形が變る譯です。だから我々はもつと自身によく考へを致さねばならぬと、斯う始終思つて居ります。」と「俄神道家」の存在を堂々と批判することも出来た。また、「贖罪と言ふと、耶蘇教みたいですけれども、古い宗教的な形を持つてゐるもので、贖罪の觀念のないものはありません。神道だつてあります。我々も無暗に宗教といふ名前を命けるのは嫌つて居りますけれども、それは間違ひであります。神道の宗教方面―世間普通の宗教と同じに、是だけの信仰があつて、是だけの情熱があつて、宗教でない訣がない。唯その、儀式ばかりしてゐるやうに思うてゐるのは間違ひなのであります。」と明快に「神道宗教論」を述べることも許された。折口が「草莽（人）」を自称して歌を詠んだのは事実だが、それは折口の「一面」であつたといふ、これまた事実を示してゐるに過ぎない。世に普く知られた学者・折口信夫として、その学問的営為の（その都度の）成果を折口は専門学術誌、一般啓蒙書を問はず種々の媒体を通して発信してゐたのであり、折口の「かむながら」、「あきつみかみ」、「みこともち」などを中核とする神道論・天皇論についても神社関係者は無論のこと、広く国民も知ることが出来る状況にあつたことを忘れてはならない。

また、当の折口にしても「わが胸の思い」を草稿のまま埋もれさせ、あるいは信州の一神職会の神職だけにそれを吐露して満足してゐたわけではなく、広くその「学説」を世間に向けて発信してゐるのである。その一例を挙げておかう。当時万葉集に興味・関心のある者なら誰でもが気軽に手に入れられる文庫本として、昭和十三年一月に新潮社

から澤潟久孝・土岐善麿と共著で刊行された『萬葉集研究』[48]がある。その中で折口は「みことも ち」や「かむながら」など天皇論・神道論にも関係の深い事項・語句にも触れてゐるのであり、「かむながら」の語句をめぐつては「近代の感覺からすれば「神そのまゝ」の方が、神聖感深く思はれるが、古代精神からは「人であつて、神にいます」事を言ふ方が、莊嚴を感じたのだ。これを名詞で申さば「現神（あきつかみ）」といふ事になるのだらう。」と折口にしてはかなり平易な解説を施してゐる。

かかる折口の天皇論や神道論について、新たに神宮権禰宜から『皇國時報』の編輯責任者となつた千種宣夫を始めとする神社関係者が無知乃至無関心であつたとは思へない。単に神社界に所縁のある著名な歌人の一人を選者として千種らが招いたといふのなら話は別であるが、親友であつた故氷室昭長全国神職会常務理事などの神社関係者と折口との関係からするならば、『皇國時報』の関係者にとつて折口は「身内」同然の学者・歌人なのであつた。神社関係の読者が折口の学説や歌に関するある程度の知識を有してゐたことは明らかであり、その知識の程度は『婦人公論』や『短歌研究』の読者に勝ることはあつても劣ることはなかつたと考へるのが妥当であらう。折口の「大君は」以下五首の『皇國時報』に掲げられた歌の真意が、歌集として公刊された『天地に宣る』の読者のどれほどに理解されたかは知る由もないが、『皇國時報』に掲載された昭和十六年十二月八日の宣戦詔書及び昭和十七年三月の満洲建国十周年に関はる釈迢空・折口信夫の短歌を最初に見たのは折口が「同業」と言ふ多くの神社関係者であつたことは、いくら強調してもし過ぎることはない。戦前の折口の「神道論・天皇論」を真摯に受け入れたのも、あるいは拒否したのも彼ら神社関係者を措いて他にはなかつた。それを折口は知つてゐたからこそ、選者を引き受けた『皇國時報』紙上で連作「神威」及び「滿洲國皇帝陛下」の誕生（みあれ）をも―皮肉をも籠めて？―寿いだ歌を全国の神職に向けて発表したのである。

神怒　昭和十六年十二月八日

大君は　神といまして、神(カム)ながら思ほしなげくことの　かしこさ
暁の霜にひゞきて、大みこゑ聞えしことを　世語(ヨガタ)りにせむ
神怒り　かくひたぶるにおはすなり。今し　斷じて伐たざるべからず
天地に響きとほりて　甚大(オギロ)なる神の御言(ミコト)を　くだし給へり
畏くて涙流れぬ　神(カム)ながらこの御(ミ)怒りのみ言　聞きつゝ

滿洲建國十周年を祝ふ日に詠める歌

滿洲國皇帝陛下　白蘭(ハクラン)のよそほひ淨く　立たせ給へり
愛親覺羅氏(アイシンカクラシ)　久しく統を垂れし後、君に到りて　大いに興る
稚國(ワカグニ)のいや榮えゆく淨らさを　日東の天子　よろこび給ふ

『皇國時報』に掲げられた折口のこれらの「神学的戦争短歌」とも称すべき一連の歌を読者それぞれがどう感じ、何を思つたのか、それは知らない。ただ、読者の多くが「宣戦の詔書」にある「豈朕カ志ナラムヤ」や「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」[49]の語句を折口の短歌に重ね合はせて噛み締めたであらうことは想像に難くない。しかし、大君（天皇）と「満洲国皇帝陛下」が同じ「神といます」存在（現人神！）と理解した神社関係者はゐなかつたであらう。

七　折口「戦争歌」に見る「天皇と神」

前述したやうに、昭和十六年九月、折口信夫は北京の皇典講究所華北總署で「古代人の神道」と題する講演を行つ

た。これは戦前における折口の最後の纏まつた「天皇論・神道論」であり、その講演録は華北總署の機関誌『惟神道』の昭和十七年二月号から五月号に掲載された。講演の冒頭で折口は、「日本の神道といふものは宮廷―皇室から出てゐるのであり、皇室の神道が日本の國の神道の基である。此事は説明する迄も無い事柄である様にも考へられるが、之に關する知識理論を明確にして、お互ひの信念を一層深めたいと考へる次第である。」と切り出して、折口が年来抱いてゐる神道論―そこには「惟神（かむながら）」、「みこともち」、「天皇霊」といつた折口の「天皇論・神道論」の核を構成する鍵語が鏤められてゐる―を改めて開陳した（無論、折口は昭和四年の段階で「歴史的に言へば、原始的な神道は宮廷の神道そのものではない。」とも断言してゐるのであるが）。そして折口は講演の最後でも念押しのやうに、「私の説明に不十分な點もあるが、唯々かうして宮廷の御信仰が段々下へ〳〵及んで來たのであり、日本の神道といふもの、根本が宮廷にある、といふことを明記して戴きたい。宮廷の御信仰から申し上げなければ神道のことは理會出來ない故に、誠に懼れ多いことであつたが、宮廷の御話を申し上げた次第である。」と述べ、「神道の基は宮廷神道」にあることを強調してゐる。この折口の講演を聞いた者はもちろんのこと、その講演録を活字で読んだ者も均しく神道（神社神道）が宮廷（天皇）なしに存在し得ないこと、それを改めて「知識理論」の点からも実感したことであらう。

そんな折口信夫を戦時下の神社関係者が、「神と天皇と人（民族）」を詠つた戦争歌を作る歌人として素直に受け入れたのは当然のことであらう。「大君は　神といまして、神ながら思ほしなげくことの　かしこさ」の一首に、天皇と神との関係の不可分を読み取ることと「人間天皇」の苦悩を思ふこととは必ずしも矛盾しない。ましてや折口はその後も前記赤木健介が引用した「現つ神　わが大君は、神力まねく足ひて、なほいのります」、「大君は　神にしませば、天地の神の軍を　あどもひ給ふ」などと、天皇が「神」として皇祖神（大御祖）に祈念し、そして「現つ神たる

大元帥」として「神軍（皇軍）」を統帥するさまを「萬葉の古語」を駆使して荘重に詠ひ上げてゐるのである。これらの歌から国民が、天皇が「現つ神」として天地の神々と軍とを統率するばかりでなく、なほも「神国日本」の勝利を親ら神に祈念する「神としての天皇」であることを感じ取り、読み取つたとしても聊かも不思議ではない。因みに、これらの折口の短歌と、折口も知己であつた御歌所寄人であり國學院大學の教授も務めた金子元臣の「天皇陛下伊勢の神宮に詣で給ふに」と題する「御祖神伊勢にていかに待たすらむこのいでましも人の世の爲」といふ歌とを比べてみるならば、どちらがより「国家神道」的かは一目瞭然であらう。

戦争が遂行されてゐる最中に天皇が神宮に参拝し、「神佑の下速かに聖戰目的を達成し天業を恢弘」する祈念を捧げることは「未曾有の厳儀」とされたのであり、当時の名のある歌人たちもこれを題材として歌を作つてゐるが、いづれも前記した金子元臣の域を出るものではない。

この日ごろ　御思（ミ）ひやすらにおはすらし。わがすめ神も　たたかひ給ふ

皇御孫（スメミマ）のみことよろしと　神瞋（イカ）り正に怒りて神哮（タケ）ぶらし

大御心　畏くませば、御民われ現（ウツ）し心もみだれて　哭かゆ

これらの歌も昭和天皇の神宮参拝に際して詠まれたものであるが、この三首だけでも折口にとつての戦争とは何か、を窺ふには十分な内容を有してゐる。皇祖神をはじめとする神々、「現つ神」としての天皇、そして「御民」もそれぞれが協力して戦つてゐる歓喜と愁ひに満ちた状況、折口にとつての「戦時下の日本のあるべき姿」がここには詠はれてゐるのである。ただ、この段階で未だ詠はれてゐなかつたものがある。言ふまでもなく、戦争による「死」と「神」との関係、それを象徴する神社としての靖國神社に関する折口信夫の思ひとそれを託す短歌である。

大東亜戦争開戦から二年目に入つた昭和十八年の四月、靖國神社の第六十二回招魂式・臨時大祭が執行され、折口

信夫も四月二十二日の招魂式に参列した。折口信夫の招魂式への参列はその時が初めてであり、感慨も殊のほか深かつたものと見え、その時の光景と感想を二首の短歌を添へて放送で披露し、五月十八日には金田一京助らと「招魂の御祭」を中心とする懇談会を開いてゐる。[50] さらに、折口自身が会長に就任した藝能學會の機関誌『藝能』の七月号に招魂式当日の感想記である「招魂の御儀を拜して」を掲載してゐる。その内容は、いかにも折口らしいしみじみとしたものであり、「私は、たゞ歡喜と言ふより、もつと底深いおちついた、澄みきつた心を以て」と『天地に宣る』の「追ひ書き」で書いたやうな折口の心持が綴られてゐる。しかし、単なる感慨が述べられてゐるだけではないところに折口の真骨頂があることも事実である。

それは、「この招魂法を以て、此度迎へられたみたまは凡そ三年近い年月を經た御魂が、今や完全に神様におなりになつた。現在の信仰では、凡そ此だけの時を經れば、神となられるものと、信ぜられてゐる訣です。」といふ折口独特の皮肉とも受け取れる言ひ廻しである。因みに、これに着目して、折口は「あくまでも「靖国」の思想に違和感を示している」、「急ごしらえの信仰への違和感を示している」と解釈する向きもある。[51] しかし、さう短兵急に折口を「反国家神道・反靖國思想」の持ち主に仕立て上げなくても良ささうなものである。折口が、若くして戦死した将兵及びその父母の心境を詠つた短歌は、既に昭和十七年五月のシドニー湾特殊潜航艇攻撃で「戦死」した松尾敬宇海軍大尉等を題材にした「若き神」に見ることが出来る。[52]

ますら雄の心深さは　うやうやし。母(オモ)にも言はず　別れ來にけり
潛(カツ)く舟　ゆきて還らずなりしより、思ふ子どもは　神成(カミナ)りにけり
母父(オモチ)に心を分きて告げざりし　ますら武夫の思ひ　かなしも

これも戦時下の様々な「靖國思想」の折口流の表現なのである。そして「招魂の御儀を拜して」の冒頭及び末尾に

据ゑられてゐる「大君は神にしませば、ますらをのたまをよばひて　神とし給ふ」、「まのあたり　神は過ぎさせ給へども、言ひどいがたき現身　われは」も折口が詠つた「靖國思想」の短歌による表現なのである。さもなければ、いかに著名な歌人であるといつても、『藝能』といふ民俗芸術の専門雑誌に掲載した小文を「現在の信仰では、凡そ此だけの時を經れば、神となられるものと、信ぜられてゐる訣です」の部分などを削除し、しかもこの二首の短歌を「大君は　神にしませばますらをのたま呼びまして　神としたまふ」、「目のあたり　神は過ぎさせ給へども　もの申しがたき現身（ウツシミ）　われは」と「改竄」してまで少年少女向けの週刊新聞『週刊少國民』に掲載する筈はないだらう（勿論、「権力」や新聞社の圧力に屈した可能性も否定出来ないが、それを示す資料等を筆者は寡聞にして知らない）。といふのも、折口は子供たちにも伝へたかつた「招魂の御儀を拝して」の核心部分を次のやうにほぼ原形のままで述べてゐるからである。

ふと私の目にとまりましたのは、私の前にをられた、さつき申しました、あの旅の路でよく出あふことのあるといつた、お年よりの女の方が、ふつと立つて、じつと何だか、心があつてかなくてか、立つたまま、ぼんやり何かを見つめられてゐる後姿でありました。喜んでをられるのか、憂ひてをられるのか―いやさうではない。ほとんど無心に、子供のやうな氣持で、御羽車のゆれていかれる様子を、見つめてをられるのではないかと、私はふつと感じました。

私ども日本國民の心持としましては、これほどうれしくなくてはならぬ、喜ばなければならぬ時はありません。しかしなほよく考へますと、今こそ人間として永久の別れであります。平凡な人間のからだは、草の種の枯れては伸び、伸びては枯れていきますやうに、生まれかはつていきます。國家のため、何ほどの役に立つこともできずに、私どもは殘念ながら、このまま、草のやうに消えていくのです。だがかうして、今宵神になられた、わが

父・わが子・わが夫は、永遠に亡くなられることなく、榮えていかれるのだといふうれしさと同時に深い人生の思ひに觸れてゐられることだらうと思ひました。

これこそ國民として魂の底にしみとほるやうに深い、そして靜かな感激であると私は思ひます。かういふ深い精神から、日本人の底知れぬ強さが出てくるのです。

このやうに、折口は子供に向かつて己の「靖國思想」を語り掛けてゐる。この小文を書いた「折口信夫」が何者であるのか、「(折口信夫先生は文学博士國學院大學教授)」と末尾に肩書は紹介されてゐるものの、多くの子供たちには未知の「先生」であつたらう。しかし、戦死した自分の父親が「永遠に國まもる神」となつた意味を、「折口信夫先生」は「大君は　神にしませばますらをのたま呼びまして　神としたまふ」といふ歌で表現してゐるのだ、と感じ取つた子供もゐたであらうし、そこに「うれしさと同時に人生の深い思ひ」を切々と感じ、「日本人の底知れぬ強さ」を確信した遺児もゐたかも知れない。(53)

折口信夫の唯一の纏まつた「靖國思想」ともいふべき「招魂の御儀を拜して」に折口の「反靖國思想」を見ることも可能であらうが、それが紛れもない当時の「靖國思想」の一つでもあつたことも忘れるべきではない。何度も言ふやうに「草莽」ならば、精々が『藝能』の掲載で済ませば良い折口個人の「靖國思想」の筈である。それを「靖國神社臨時大祭　招魂の御儀を拜して　永遠に國まもる神」の見出しと「折口信夫」名で、昭和十八年十月の第六十三回臨時大祭に合はせて発行された『週刊少國民』にわざわざ「再掲載」した折口の意図・心境をこそ問ふべきではないのか。

既に見て来たやうに、折口は大東亜戦争開戦以降、まるで取り憑かれたかのやうに戦争短歌を作り、新聞や雑誌に発表してゐた。戦況がますます悪化した昭和十九年十月の靖國神社臨時大祭に際しても、折口は同年十月二十二日付

けの『毎日新聞』に「新神降りたまふ」と題する次のやうな歌を発表してゐる。[54]

大君の御言かしこし。つばらかに　こゝだの神のうへをほめたまふ

身の後（ノチ）に來つゝあらむと　言ひ行きし誓ひ正しく　還り鎭まる

ますら雄の果てしあとゞころ　思ひ得ず遙かなれども、こゝに神集注（カムヅマ）る

生ける日のからきいくさを　神々の心眞澄みに　思ほさむかも[55]

昭和十九年十月二十二日、二十三日の二日間、靖國神社では第六十五回の招魂式・臨時大祭が執行された（例大祭は同二十四日）。この招魂式で新たに合祀された「新祭神（新神）」は、大東亜戦争の戦歿者一万六千三百七十三名（陸軍一万八百七十七名、海軍五千四百八十六名）の他に満洲事変・支那事変での「合祀未済者」三千八百二十四名を含む二万百九十七柱に達してゐたが、それら戦歿者の多くの遺族は、折口が詠つた「大君は　神にしませば、神集ふ祭りの庭に行幸し給ふ」[56]といつた光景を靖國神社境内で目にすることは出来なかつた。戦局の悪化を反映して、同年春の合祀祭まで行はれてゐた内外の各地から遺族が参列しての招魂式・臨時大祭は執行出来なくなり、地方の遺族にとつての東京見物を兼ねた靖國神社参拝も不可能な状況となつてゐたからである。[57]そのやうな状況下で、『毎日新聞』といふ全国紙に「新神降りたまふ」は掲載されたのであり、このことの持つ意味は決して軽くない。靖國神社での招魂式に参列出来たのは東京都在住の遺族約千名ほどに過ぎなかつたことを考へるならば、折口の「新神降りたまふ」は実況放送にも勝るとも劣らない「発信・受信」の効果を有してゐたのである（折口は前記「大君は　神にしませば、神集ふ祭りの庭に行幸し給ふ」といふ歌を作つてゐるが、昭和天皇が靖國神社に行幸・親拝したのは臨時大祭・例大祭終了二日後の十月二十六日であつた）。

昭和十七年四月の段階での招魂式・臨時大祭とは全く「時勢」が違つてゐたのであり、「招魂の御儀を拝して」の

光景に見られる「牧歌的な雰囲気」は、この「新神降りたまふ」の時期には最早存在しなかつたのである。折口信夫とても「草莽」として時代の移ろひに背を向けて生きてゐたわけではない。否、寧ろさうした時代（戦時下）であるからこそ、折口信夫は自ら率先して「民族の戰士・文化の戰人」[58]として「戦争詩歌」を作り、それを新聞・雑誌等に発表し続けたのである。

「先生の作品も、この集には、大東亜戦争の起つてからの、民族感情を歌はれたものが多い。」といふ中村浩・藤井貞文・藤井春洋・高橋英雄といつた年長の折口門下生が『鳥船　新集第二』の「追ひ書き」に記したのが昭和十八年五月三十日のこと。[59]そして翌十九年十二月には折口自身が編輯した『鳥船　新集第三』[60]が刊行され、折口は短歌を「抗儒集」として、長歌・詩を「感愛集」としてそれぞれ纏めて収録してゐる。無論、その中には「民族感情」としての「戦争詩歌」も相当数含まれてゐる。だが、何度も言ふが、その中の作品を抜き出して「戦争讃美」や「戦争批判」の証拠品でもあるかのやうに言ひ立てることにどれほどの意味があるのだらうか。「若連中の多くも、去年十一月以後、出陣したものが多かつた。私は今、彼らの、暫く學と文學とを忘れて、専ら戰場の人として、最も深い生を營むことを希つてゐる。」と「追ひ書き」に記した折口信夫の「心境・真意」を汲み取るだけで十分ではないだらうか。折口信夫の「民族感情」を詠つた一連の戦時下の歌が、同じ戦時下を覆つた「民族感情」の国家的制度としての国家神道と無縁であるわけはなかつたのである。

八　折口「国家神道・民族教」の終焉―結びに代へて

「大君は　神にしませば、神業の奇瑞（クシビ）をふたゝび　あらはし給へり」と詠まざるを得ない国の状況に己を重ねて、「神

と天皇と民族」の戦争を折口は短歌に託した。[61] しかし、奇瑞はあらはれず、「南の遠の皇門の防人よ。わが大君は頼みたまへり」、「わたの島　寸地も讐にゆるさじと誓へる心　君は知せり」[62]と放送で朗詠（絶叫？）した甲斐もなく、硫黄島も陥落し、「防人」も逝つてしまつた。折口信夫の「神と天皇と民族」の戦争は敗北に終り、折口の国家神道・民族教も終焉を迎へたのである。折口が宮廷神道と神社神道にかかづらはることなしに原始信仰を只管追究してゐたならば、国家神道の埒外の一歌人・学者として戦時下も生きられた筈である。しかし、折口にはさういふ生き方は出来なかつたし、またしようともしなかつた。その折口の心境について、折口信夫の短歌の弟子であり、国史学者であつた村田正志は次のやうに述べてゐる。[63] 即ち、「開戦当時の先生の感激は、先生にとつても、まことに甚大であつたと思ふ。…戦ひが、みことのりによつて正され、我々すべての者の責任と労苦となつた、あの日本民族の伝統の感激とでもいふべきものであつた。この感激は、先生の文学及び人格を、一挙に甚しく飛躍せしめたと考へられる。」、と。

この村田正志の言が、「大東亜戦争を戦ひ抜いた折口信夫の姿」を的確に捉へてゐるかどうか、筆者には分からない。だが、村田の言ふことが当つてゐるとするならば、村田に倣つて、昭和天皇の「みことのり」が、敗戦後の折口信夫を再度「一挙に甚しく飛躍せしめた」と考へても強ち的外れではないだらう。その解答は、戦前と戦後の折口信夫の「連続と非連続」を改めて考察・検討する作業に委ねてからでも遅くはない。その結果がどう出ようと、「事毎に矛盾を持つ私として、こんな不覺も敢へてする」と述べた折口信夫の一面であることは確かなのであるから。

私のなつかしいふるさとの詩情が、崇高な民族の信仰や祭祀の學問のうちにこそあることを教へていたゞいたことが、自分が今日生きうる使命感と責任觀との原因である。この意味でこの巨き折口先生に序文を賜つたことは、私の最も大きなよろこびであり、又意味ふかく有難いことであつた。自分のすべての出發が、折口先生にあ

つたことを思へば、この集は、この意味でも、まづ第一に折口先生に差しあげようと思ふ。（山川弘至『ふるくに』「あとがき」）

「八月十五日の聖旨」を聴かずに戦死して逝つた山川にも折口信夫に教授された「古義神道」といふ浪漫的な「国家神道」があつた。それも「国家神道」である、といふのが「戦争の時代」であつた。

註

（1）『讀書人』は、出版・取次業者の東京堂が大正三年以来刊行してゐた『新刊圖書雜誌月報』及びその後継誌『東京堂月報』を拡大・充実した総合読書雑誌である。昭和十六年十二月号を以て第一巻第一号とし、昭和十九年四月発行の第四巻第四号を以て廃刊となつた。その理由について「終刊の辭」は、「三月に至つて突如日本出版會より廢刊を命ぜらる。出版企業の數量的整備の原則以外には、何らその理由を詳かにせず」と記してゐる。「聊か草莽の微衷を致し」て来たといふその自負も「時勢」の前に潰えたのである。因みに、昭和十七年十一月号の同誌「新刊分類目録」には、折口の盟友・土岐善麿が同年八月に日本評論社から刊行した歌集『周邊』について「大東亞戰勃發後の歌集、凱歌、を始め紀元頌歌、進轉、良識等々の篇より成る歌集」と紹介されてゐる。折口の『天地に宣る』、土岐の『周邊』は赤木健介の肝煎りで出版されたものであるが、赤木は同年三月に刊行した歌集『意慾』（文化再出發の會）の「序」を土岐善麿に依頼してゐる。なほ、『讀書人』昭和十七年五月号には「短歌の現代的性格を論究する著者の意圖實踐の現れたる抒情詩的新傾向に依る短歌集」とある。折口、土岐、赤木の三者の関係は「戦時下の折口信夫の処世」の或る一面を窺はせて興味深いものがある。

（2）以下、本稿では「釋迢空」名の作品等であつても、引用文等を除いては「釋迢空」は使用しないで「折口信夫」乃至「折口」と表記する。また、折口信夫の作品等の引用に際しては出来る限り初出に当り、出典を明記した上でその表記等に従ふことを原則とする。未見のものは『折口信夫全集』を使用するが、その際、「折口博士記念会」編は「第一次全集」、

「折口博士記念古代研究所」編は「第二次全集」、「折口信夫全集刊行会」編は「決定版全集」とそれぞれ略記し、漢字・ルビ等の表記も各全集の記載に従ふことにする。

（3）『天地に宣る』に言及した論考等は戦後においてもごく少ない。岩田正『釈迢空』（紀伊国屋書店、昭和四十七年）、岩松研吉郎『倭をぐな論―その周辺』（『國文學』第二十二巻第七号、學燈社、昭和五十二年）、武川忠一「迢空折口信夫における戦争―短歌を中心に」（同上）、穂積生萩「迢空咒術の世界　『天地に宣る』」（『短歌現代』第七巻第六号、短歌新聞社、昭和五十八年）、野寄勉「作品解題　天地に宣る」（『迢空・折口信夫事典』、勉誠出版、平成十二年）、松本博明「分節する歌集―『天地に宣る』論序説―」（『芸術至上主義文芸』26、平成十二年）、岡野弘彦『折口信夫伝―その思想と学問―』（中央公論社、二〇〇〇年）などがあるくらゐである。

（4）『天地に宣る』所収の「捷報」の部にあるこの歌を含む藤井春洋関係の短歌は七首あるが、「陸軍少尉藤井春洋、わが家に来たり住みて、ことしは十五年なり」と詞書のある藤井春洋関連の歌が発表されたのは『日本評論』昭和十七年一月号（第十七巻第一号）に掲載された「伴の隼雄」においてである。それには「遙かなるかなや汐路の南に、伴の隼雄は　今し戰ふ」など開戦当初の「捷報」を詠つた勇ましい歌もあれば、「老いづけば、人を頼みて暮らすなり。たゝかひ　國をゆすれる時に」、「たゝかひに　家の子どもをやりしかば、われひとり聽く。捷ちのとよみを」といつた世の親の思ひを自己に重ねて「戦争の影」を詠つたものもあり、以後の折口「戦争歌」を象徴してゐると言へよう。また、この「伴の隼雄」で「―肅たる　天子の貔貅。聊か、古語を以て翻し、感激の意を表すこと、かくの如し。」と記されてゐるが、ここにも折口の戦争短歌に対する「古語」を使用しての折口独自の思想と表現が見て取れよう。

（5）折口が戦前・戦後を通して「天子非即神」論者であつたかどうかを巡つては様々な見解が出されてゐるが、折口が最も重視したのは天皇の「聖旨」、即ち「大御心」であつたことに留意すべきである。「大御心　畏くませば、御民われ現し心もみだれて　哭かゆ」といふ昭和十七年十二月の昭和天皇の神宮親拝に際しての歌（「第一次全集」第二十二巻、四〇九頁）、あるいは敗戦後の「大君の　民にむかひて　あはれよと宣らす詔旨に　涕噛みたり」の歌（『倭をぐな』、中央公論社、昭和三十年、八六頁）や「當時あれほどに驚いた「天子非即神」の詔旨の深い思ひを、安らかに諾ふことの出來る日が來たのである。今私は、心靜かに青年たちの心に向つて「われ　神にあらず」の詔の、正しくして、誤られざる古代的な意義を語ることの出來る心持ちに到達した。」（「天子非即神論」、「第一次全集」第二十巻所収、六三頁）と述べてゐることの意味をまづは考へるべきである。

（6）折口は「戰場詠」を作る弟子の作品を添削しつつ、「戰場詠は、苦勞だらうが、苦しんでほしい。今が歌の上でも人間になれる時だ。」、「いくさの歌といふものは、敍事詩でなく抒情詩でなければならぬ。戰爭の歌は、小説や劇であつてはならぬ。小説・劇の與へる效果を與へては失敗で、また普通の抒情詩とは、いくらか違ふ。」などと厳しく指導してゐるのを見れば（『鳥船　新集第二』、青磁社、昭和十八年七月、一七一頁～一七四頁）、折口自身の「戦争歌」を作る姿勢の厳しさが窺へるのである。

（7）鈴木亨の記憶によれば、折口は昭和十六年十二月八日の慶應義塾の講義で教室に入るや否や「大君は　神といまして」など『天地に宣る』冒頭所収の短歌三首を板書したといふ（穂積生萩『折口信夫　虚像と実像』、勉誠社、平成八年）。また、塚崎進によれば十六年年十二月（塚崎は「十五年十二月」と誤記してゐるが）の繰上げ卒業の試験場で「今し斷じて征たざるべからず」の歌群を黒板に走り書きしたといふ（「父と子の戦争歌集　歌集『天地に宣る』」、『短歌現代』第十一巻第二号、昭和六十二年）。しかし、いづれにせよ大学内での話であり、筆者が本稿で問題とする「公表された折口戦争歌の意義」を問ふ作業とは直接関係はしない。

（8）「禊ぎの話」は昭和十六年十一月七日に大阪に鎮座する府社御霊神社で開催された講演会で話したものであり、折口に講演を依頼した社司の園克己は東京帝国大学文学部心理学科を卒業して神職となり、戦後は神職の傍ら大阪國學院や浪速学院の理事長も務めた異色の神職として知られた。また、これを転載した『皇國時報』の編輯部主任の千種宣夫は兵庫県の社家に生まれ、皇典講究所教習科を卒業後神職となり、大阪の阿倍野神社主典、神宮権禰宜等を経て昭和十七年四月十八日付けで『皇國時報』編輯主任に就任した。千種は戦後、皇典講究所・國學院の教員では河野省三と折口信夫以外に尊敬する教師はゐなかつたと回想してゐるが、千種も一種気概のある神職として知られた人物であつた。

（9）ここで「神社神道」と記したのは、それが折口自身も戦前から使用してゐる言葉でもあるからである。ただし、この神社神道と折口信夫の揶揄し批判する「新式神道・官廳神道」とは微妙に且つ決定的に相違してゐることに注意すべきである。これを混同して、折口は「現行諸神道の史的價値」などで「神社神道を批判」してゐるなどと唱へる論者や、あるいは戦後的見地からする「折口は国家神道の批判者」と説く論者もゐる。その当否の詳細については、いづれ稿を改めて論じるつもりであるが、ここでは折口が追慕して已まなかつた「橿原の宮」も近代の「国家神道」の一大聖地であつたことを指摘しておくに止める（「古事記の空　古事記の山」、『婦人画報』昭和十七年十二月号、第三十六巻第十二号、東京社、参照）。

(10)　神道考古学者の大場磐雄は、昭和三十一年二月発行の「第一次全集」第二十巻「附録月報」第一七号に「常世にいます先生へ」と題する回想文を寄せ、その中で「生前先生御自身で神道學者とおつしやつたことも聞きませず、又世間でも先生を神道學者だと言う方は稀であろうかと存じますが、私にとりましては矢張先生は偉大な神道學者であられたと信じて居ります。と申しますのは先生の神道學は從來の殊に大戦前のかいなでの神道學者の説く所とは、大きな隔たりがあつたからであると推察致します。」と書いてゐる。折口以外の「神道学者」を「掻き撫で」などと侮蔑的に形容してゐることはともかくとして、折口自身は神職を相手に「古代の研究は神道の研究となり、民俗學の研究も神道の研究となる」と明確に述べてゐる（『折口信夫先生述　古代研究』所收「神道と民俗學」、昭和九年三月、三頁）。神職に対して「ご同業みたいなもの」、「何しろ私共の居ります所は神道の本家みたいな所ですから」と語る折口に神職（神社界）がある程度の親近感を有するのは当然であつた。

(11)　これらの歌は、昭和十八年十二月十二日付けの『東京新聞』に「神躬ら祈る」と題する連作にある歌であるが、この日は前年の昭和天皇神宮親拝を記念する「御親拜記念日」に当つてゐた。

(12)　折口は、敗戦一年後の昭和二十一年八月二十一日に神社本庁の主催で開催された関東地区の神職講習会に講師として参加し、「祭祀と組織」について講義した。同年一月には所謂「天皇の人間宣言」があり、この講習会でも「天子即神論」に若干觸れて批判してゐるが、未だ本格的な「天子非即神論」は展開してゐない。それよりも、重要なのは「我々は驚くほど競争者がなくなつて、今は靜かに考へる時が來た。宗教化して行く時代がいつかある筈だつたが、この戦争によつて早く來ただけといふだけである。」と述べてゐることである（『神道宗教化の意義』、神社新報社、昭和二十二年十月、一一頁）。この筆記録は折口の門弟であり、後に東照宮（日光）の権宮司になつた矢島清文が筆記したものを折口自身も目を通してそのまま冊子にしたものであるから、当日の講義をかなり正確に記録してゐると考へていい。だとするならば、「この戦争」が、恰も「神道の宗教化」を結果的に早く齎したに過ぎない意味しか持たなつたかのやうな口吻は折口の本音であらう。

今の世の幼きどちの　生ひ出でゝ　問ふことあらば、すべなかるべし

世の轉變を、思ひがけなく見た。國學の系譜の末に列る私には、特にその思ひが深い。前月十五日の後、暫く山に入つて、ものを考へて見たけれど、思ふ通りの決斷もつかなかつた。さうしてまた、山となぢみ淺き生活に戻つた。首陽の蕨を嗤うた考への淺さが、つくづくと省みられる。昔の「隱者」なら、こんな時、わびしい述懐を陳らねる

だらうが、今の世の我々は、唯業さらしの姿を、次代を擔ふ幼き者等の反省の料に、留めておくほかはない。

かう、折口が記したのが敗戦直後の九月九日のこと（『山の端』「「追ひ書き」、八雲書房、昭和二十一年六月。なほ、この歌集は当初「新日本歌集」として斎藤瀏の『光土』、土岐善麿『秋晴』などと共に昭和二十年十一月に刊行される筈であつたが、何らかの事情で判型も改められて二十一年六月の刊行となつた）。「世の轉變を、思ひがけなく見た」に過ぎない傍観者にとつては、戦争を詠つた歌も所詮は「次代を擔ふ幼き者等の反省の料」でしかなかつたのであらう。ならば、「首陽の蕨」を食みつつひそやかに歌を詠んでゐればよかつたのである。だが、折口はさうはしなかつた。昭和二十年三月十日の陸軍記念日で杉山元陸軍大臣が全将兵に対し「特攻の権化となり断固滅敵」の異例の布告を出し、その夜には「東京大空襲」のあつた頃、折口は「特別攻撃隊員讃歌」と題する詩を『週刊毎日』（第二十四巻第一号）に寄せてゐた。そのことだけでも、「戦争期の折口の歌には、稀に身に添わない表現で戦う国の興奮を歌った作品もあるが、多くは戦いの中の名もなき草かげ人の生や死のかなしみに心をそそいでいる。」（前掲岡野『折口信夫伝』、二七二頁）といつた類の、「世の轉變」を捨象した作品評価や「愛国的短歌」の数の多寡などの次元で語られるべき問題ではないことは自明であらう。生と死の悲しみを詠つた詩歌が、人をして縦容として死に赴かしめることもある。斎藤瀏張りの歌だけが戦時下の「戦争歌」ではない。「大倭壯夫」のやうな「戦争詩」を発表し、「島を守る巫女」といつた「創作」をラジオで山本安英に語らせることが出来るのは折口信夫だけだつたのである。

（13）「危急を告ぐる諷歌」（昭和十九年三月八日～十日『東京新聞』、「第一次全集」第廿八巻所収、四三四頁～四四二頁）

（14）その意味で、折口の「教へ子」である山川弘至の詩集『ふるくに』（大日本百科全書刊行会、昭和十八年一月）に折口信夫が保田與重郎と共に「序文」を寄せてゐるのは象徴的である。折口は「併しどうあつても、山川君自身に望むよりほかにないものは、愛國の情熱の、愈々その詩をたぎらせることである。だが此は、この人の故郷の山水に信頼して、疑ふ必要はないと思つてゐる。」と結んでゐる。この文だけでも戦時下の折口を窺ふに十分と思ふが、それと共に考ふべきは、山川など「教へ子」に対する折口信夫の影響力・感化力の問題であらう。「この詩集の巻頭は折口信夫先生と保田與重郎氏の序文に飾られるとのことこの巨き大人と、佳き先達の序があれば、微少わたくし如き何事もつけ加へることはない筈である。殊に折口先生の弟子の末席を汚す自分として、同じ書册に名を連ねることは分を越えた憚り多いことのやうに思へる。」と牧田益男は「跋文」に書いてゐるが、折口の戦時下の言動は、独り折口信夫個人の次元だけで語られるべきではないと思慮する。

（15）昭和二十年三月三十一日付け酒井治左衛宛書簡（「第一次全集」第三十一巻、二七三頁）。折口はその前の書簡でも「一番くやしいのは、かういふ学問の外に出来ぬ才能しか与へられなんだ言ふかひない私自身です。」と酒井に書き送つてゐる。「国学者の末」を自認し、「気概の国学者」として振る舞つて生きるしかなかつた戦時下の折口の悔恨が如実に示されてゐる。時勢の逼迫で定期の発刊もままならない『短歌研究』の昭和二十年三月号に「短歌の本質と文學性の問題」を載せ、併せて「折口春洋　釋迢空」の連名で「砲眼消息」も掲載してゐる。折口の春洋への想ひと、それを掲載した編輯者木村捨録の思ひ遣りが、この五十頁足らずの雑誌に籠められてゐるのである。その雑誌巻頭の「時言」には「わが歌心の正しいありやうと敢て一言にしていふならば、花鳥に情を勞する風雅のまことを以て現津神たる至尊に仕へ奉り、また大御心を奉ずるまめごころを花鳥の情として抒べるといふに盡きよう。」と記されてゐる。以て「戦時の短歌」の何たるかが知られるのであるが、これを読んだ折口はどう思つただらうか。

（16）折口が赤木健介の介在で『天地に宣る』を日本評論社から刊行した経緯等については、後で触れることにし、ここでは折口の作品発表の媒体等との関係について、以下少しく述べておく。折口が開戦後の「戦争歌」を最初に発表したのは『週刊朝日』第四十巻第二十九号においてであつたが、月刊の短歌専門誌や総合雑誌に開戦後の「戦争歌」を最初に掲載した雑誌は註3で触れた『日本評論』の昭和十七年一月号であり、これまで所縁の改造社発行『短歌研究』一月号（第十一巻第一号）の北原白秋や土岐善麿等の「戦争歌」を掲載した「特輯　宣戦の詔勅を拜して」には寄稿してゐない。折口が座談会は別として、『日本評論』に登場したのは昭和十三年五月号掲載の「壽詞をたてまつる心々」が最初であるが、この一種「叛逆論」でもあり、「学問論」とでもいふべき論考は当時の日本評論社といふ出版社の「社風」とも合致するものであつた。折口が「政治」に並々ならぬ関心を示してゐたことは、同誌の昭和十六年二月号掲載の「家とは何かを語る座談會」に白柳秀湖、村川堅固らの歴史研究者に交じつて「長子とか末子とか中子とかいふことなしにだれでもして居るぢやありませんか。歴史の判つて居るところでは神祕な威力のある人が選ばれて居りますから、だからさういふ力が長子にあるといふやうな信仰が盛になつて來れば長子相續になつて來るでせうし…。只今ハツキリと判りませんです。」と微妙な言ひ回しで「家長選挙」を語つてゐることからも窺はれる。「神と天皇」の「まつりごと」を「折口的実証」で追究した折口が「時代の政治」に関心を有するのも当然であり、それを表明する短歌や論考を『改造』や『日本評論』などの総合誌に掲載したのも折口ならではの手法であつた。短歌専門誌と新聞、週刊誌、総合雑誌の「性格」を見据ゑての「表現方法」と言へば、折口信夫を買ひ被り過ぎるかも知れないが。いづれにせよ、折口信夫の短歌や論

考の発表媒体のより緻密な考察も必要であらう。

(17)『天地に宣る』の書誌的事項について、「決定版全集」26の「解題」（岡野弘彦・長谷川政春・持田叙子）には、「昭和十七年九月二十日、日本評論社から刊行された。部数は一〇〇〇部。四六判函入り、百九十八頁。著者の自装で、表紙には箱根山荘の窓から写生した台ヶ岳の絵を貼る。題辞は本巻中扉に用いた墨書の著者自筆、左下に「迢空」の自署がある。戦時中の出版のため、出版文化協会の承認番号（ア１９０１３６）が附されている。当時としては紙質その他豪華と言うべきものである。定価一円八十銭。奥付著者名は折口信夫。」とある。因みに、「第一次全集」の鈴木金太郎・伊馬春部の「あとがき」には「四六版一九二頁…先生はこの集に、『砲前銃後』なる別題も考へて居られたが、それは、収録された一八〇首がおのづから示してゐるやうに思ふ。」とあり、「第二次全集」の「あとがき」には「四六判一九二頁…書名も當初は『砲前銃後』と題する考へがあつた。」と記されてゐる。これらの記述と「決定版全集」との相違が何に由来するのか筆者には不明であるが、現物を見る限り「B六函入上製１９２」とある前記『讀書人』の表記が正しい。無論、「決定版全集」が記す別本がある可能性まで否定するものではない。些細なことであるが、ただ、「六頁」分に何が載つてゐるのか、興味があつたから附言しただけである。

(18)　赤木健介は本名・赤羽寿。旧制姫路高校を中退後、九州帝国大学法文学部で聴講生となつたが放校処分となり、以後社会運動に従事し、唯物論研究会に所属して「伊豆公夫」名で唯物史観に基く多数の著書・論文等を執筆した。昭和十二年から日本評論社に勤務したが翌年の「唯物論研究会事件」で検挙され、第一審では懲役二年の実刑判決を受けた。昭和十六年に釈放後、再び日本評論社に戻つて土岐善麿の『田安宗武』などの編集に従事したが、昭和十九年四月に大審院で上告が却下され、下獄することになつて終戦を迎へた。赤木は少年時代から短歌や詩を好み、『在りし日の東洋詩人』や歌集『意慾』なども著してをり、『意慾』の「序」は土岐善麿が書いてゐる。戦後は、日本共産党や渡辺順三の新日本歌人協会に所属して活発な作歌・評論活動を展開した。

(19)「釋迢空論」は、赤木健介の『短歌の理論』（昭森社、昭和十九年三月）の「第二部　作歌論」に「土岐善麿論」、「前田夕暮論」と共に収録されてをり、その末尾に「（昭和十八年一月）」と記されてゐる。

(20)　その辺りの事情に関しては、赤木の「暖いおもいで」（『三田文学』一九五三年一月号、所収）や「釈迢空と土岐善麿の位置」（土屋文明編『昭和短歌史―近代短歌史・第三巻』、春秋社、昭和三十三年七月）、前掲註2穂積「迢空咒術の世界『天地に宣る』」などに触れられてゐる。いづれも「戦後的見地」からのものであり、割り引いて考へるのが穏当

である。そもそも、赤木が『天地に宣る』を丹念に読んでゐたならば、『讀書人』と同じく「二百首を超えること幾干でもなく」などと書くだらうかといふ思ひが筆者にはある。しかしながら、仮令「真実」であつたとしても、それが折口信夫、土岐善麿及び赤木健介の当時の「人格と処世」の或る一面の「事実」を物語るものであることに違ひはない。

(21) 文中に記した三首はいづれも『短歌研究』昭和十三年一月号（第七巻第一号）に掲載された「冬の葉」所収の歌であり、それには「旅にして聞くは　かそけし」の歌は「はかなし」と表記されてゐた。また、同じく「冬の葉」にある「逞しき心つのり來るこの夜らや、みなごろしにせむことをぞ　欲す」と改められてゐる。ほんの些細な表記の相違からも折口が置かれた「時勢」の変遷を見るべきであらう。尤も、この段階ですら同誌の「編輯後記」冒頭には「皇軍の聖戰に赴くところ、偉勳は萬古に輝き、國民は歡喜と緊張のうちに事變下の記念すべき新春を迎へてゐる。」と記されるやうな時代になつてゐたことも確かである。折口にも「草莽」として、「わが心おさへ難しも。草深く利鎌をふるふ。一人ひそかに」と詠ひながらも、「すめろぎの伴の隼雄に　向きて言ふことばにあらず。我はなげきぬ」、「うから人　伴の隼雄のおこすふみ　心深きに、我は哭かれぬ」と「伴の隼雄の戦」を詠はざるを得ない状況が到来してゐたのである（『短歌研究』昭和十三年七月号所収「犬儒集」）。

(22) 「大君の、みことのまにまに、戦ひ進む、丈夫のこころ、胸に湧き立つ。」と歌集『意慾』冒頭の「決戦」で歌つた赤木、そして「畏くも忠誠勇武と宣らしたまふその一億のひとりなるわれを」と『周邊』冒頭の「大詔渙発」で謳つた土岐善麿らが生じたのも、窪田空穂が昭和二十年十一月発行の『短歌研究』（第二巻第七号）で「現つ神吾が大君の畏しや大御聲もて宣らせたまふ」（「終戦の大詔下る」）など十三首を詠ひ上げたのも、「神と天皇」を基軸とする「国家神道」が存在したからに他ならない。

(23) 例へば、関口浩は「折口信夫による産霊神解釈」（『宗教研究』三七四号、二〇一二年）の中で、「折口は戦前、戦中をつうじて常に国家神道に対して批判的であった。」と断定してゐるが、それを具体的に示す根拠も論拠も提示してゐない。故に、「今や定説」化してゐると謂はざるを得ないのである。

(24) 昭和十七年十二月十二日の昭和天皇の神宮親拝は十二月三日に決定し、「本件ハ極祕トシ新聞發表及ラヂオ放送ハ還幸後ニ行フモノトス奉送迎ハ無之コト」（宮内大臣通牒）とされた。

(25) 岡野弘彦は前掲『折口信夫伝』で「（折口は）人麻呂の大げさな誇張や比喩を嫌」つたと述べてゐるが（二六五頁〜

二六六頁）、それは戦後の「天子非即神」論との兼ね合ひで言及したのであり、「宮廷歌人」として詠つた一連の「大君は神にしませば」の歌そのものを低く評価してゐたわけではなからう（『口譯萬葉集』では「傑作」と評してゐる）。

(26)　「第一次全集」第廿八巻、三九一頁～三九六頁。

(27)　赤木は具体的には挙げてゐないが、「一瞬や、我炸裂し、炎なり。はた　散りばへる飛行機の一空」などは、その典型であらう。なほ、赤木は土岐善麿の『周邊』についても同様のことを述べてゐる。

(28)　「第一次全集」第廿九巻所収、二八八頁～二九三頁。

(29)　「第一次全集」第廿八巻所収、三八九頁～三九一頁。

(30)　『大阪朝日』には國學院大學で折口と同窓であつた大道弘雄が編輯部に在籍してをり、折口とは懇意であつた。この関係から、大道が折口に寄稿を依頼したのかも知れない。なほ、大道は明治四十三年に師範部国語漢文科を卒業し、『大阪朝日』に入社。昭和十二年末の段階では「大阪朝日新聞社出版編輯部長」であつた（『國學院大學院友會　會員名簿』、昭和十二年十二月など参照）。

(31)　「第一次全集」第廿八巻、二八八頁～二九〇頁。

(32)　この歌や「國のためよく死ににけりものの數ならざるものはさびしけれども」を含む支那事変下の「戦争詠」七首が、大日本歌人協会が編輯・刊行した『支那事變歌集　銃後篇』（大日本歌人協会、昭和十六年十月）に収録されてゐる。同書「凡例」には「釋迢空」の作品を他の歌人の歌の体裁と同じく一行にした旨の断り書きがある。なほ、同書刊行前に大日本歌人協会は昭和十五年の「翼賛体制」の始動により太田水穂・斎藤瀏らの圧力によつて解散させられてゐたが、『支那事變歌集　戰地篇』（改造社、昭和十三年十二月）の「下巻」とすることが解散前に決定してゐたことから「支那事變歌集銃後篇編纂委員」（土岐善麿・川田順・松村英一）を組織して（代表は松村英一）編輯を続行し、「大日本歌人協會」名で「非売品」『支那事變歌集　銃後篇』として刊行されたものである。

(33)　井手文雄「釋迢空斷想」（『短歌研究』昭和十七年一月号）。井手は財政学者で詩人でもあつた。

(34)　「折口は放送もふくめたマス・メディアの要請に応じ「帝国日本」の〝戦勝〟、〝儀礼〟、〝祝祭〟のたびに常連として登場し、曖昧で、難解な「古語」を使って、荘重に〝神話〟を語り、喝采をおくっていた」と村井紀は述べてゐるが、折口の「一面」を衝いた指摘ではある（「折口信夫の戦争」、『増補・改訂　南島イデオロギーの発生』、太田出版、一九九五年、所収）。

(35) 前掲赤木『短歌の理論』、一四三頁。

(36) 大本営報道部の栗原悦蔵海軍少将に対する「毅然とした抗議」や所謂「アラヒトガミ事件」が折口の「抵抗精神」として今も語り継がれてゐる。だが、「今が今まで、陛下の貔貅をあだ死にさせるやうな人々でないと信頼してゐた者どもが、今になつて皆、空虚な嘘つきだつたと痛切に知つたくやしさ。たとへやうもありません。・・・國學者顔して空想ばかりを誇りかに述べて來た我々は、何として祖先に顔をあはせるのです。併し、腹はしつかりして來ました。」云々と三月初旬の段階で藤井巽に書き送つてゐる折口の心情と決意を思ふならば、折口の「抵抗精神」などといつた人物評などは第二義的問題と言ふしかない。折口の立場を踏まへての、栗原悦蔵や「アラヒトガミ事件」（山田孝雄の関与）などについても、同じく戦後的見地から公正に評価されて然るべきであらう（井上司朗『証言・戦時文壇史』、人間の科学社、一九八四年、など参照）。

(37) 折口は戦後の昭和二十一年十二月に「讀者各位よりの熱心な要望」によつて『神社新報』歌壇の選者に就任してゐるが、その「選者の言葉」で「短歌はどこまでも文學の一つである。之を作ることは別に、ほかの目的があつてすることではない。世道人心の爲に、又この新聞などからすれば、適切に神道宗教の爲にすべきものなるかのやうな考へを持つ人もあるかも知れぬ。併しまづ何よりも短歌は文學である。文學であることの目的を十分に果たして、同時にそれがさうした意味にも通じるやうだつたら、それほど結構なことはない。だが、正面からその目的を以てするなら、論文もあり、その他種々の様式によることが出來る。何を苦しんで純文學作品であるべき短歌、殊には短少な形式の短歌による必要があらう。」と述べてゐる（『神社新報』昭和二十二年二月二十四日号）。この言を折口は終始一貫して実践したと筆者は考へてゐる。

(38) 秋岡保治・宮川宗徳・高階研一の三人は戦後も神社本庁の事務総長を務めるなど神社界の指導者として活躍した。氷室昭長は鶴岡八幡宮宮司や全国神職会専任理事として昭和初期の神社界を主導して来たが、昭和十一年二月に死去した。その死を悼んで詠つた歌及び「草莽の憤り」の歌を併せ詠つたのが「雪ふたゝび到る」である。外島瀏は気比神宮、出羽三山神社などの宮司を経て昭和二十年三月に満洲国祭祀府祭務処長となり満洲に赴任、終戦を迎へて帰還したが直ぐに死去、折口は「祭文」を草してゐる。

(39) 照本亶は大正四年に國學院大學大学部国文科を卒業し、中学校教員を経て全国神職会に入り、大正十年に『皇國』の編輯主任となつた。また横浜の郷社・熊野神社社司や『皇典講究所五十年史』編纂委員も務めた。

（40）折口と河野省三との関係については、拙稿「國學院の「国学」」―「非常時」に於ける河野省三・折口信夫・武田祐吉の国学―」（『國學院大學　校史・学術資産研究』第四号、平成二十四年）、参照。

（41）この点に関しては、畔上直樹『「村の鎮守」と戦前日本―「国家神道」の地域社会史―』（有志舎、二〇〇九年）、参照。

（42）神道攷究会が編輯者兼刊行所となつて出版された『神道講座』全十二冊（昭和四年十月～昭和六年十二月）は、当時内務省神社局の考証官として著名であつた宮地直一が三宅米吉と共に監修し、宮地門下の小林健三などが編輯担当となつて刊行された、当時流行した「講座」ものの神道版である。その価値については、戦後、その覆刻版の『神道講座』（一）―神社篇―』（原書房、昭和五十六年）で西田長男が「『神道講座』覆刻版解題」を書いて至れり尽くせりの解説を加へてゐる。折口としても宮地直一の監修になる神道専門の講座執筆であるから、かなりの緊張を要する仕事であつたと思はれる。なほ、本論とは直接関係しないが、「決定版全集」20の「解題」について序でに触れておかう。この「解題」は以前の全集とは異なつてかなり詳しい書誌的事項が記されてゐる。それには「発行者は折口の教え子の四海民蔵であつた」とあるが、四海民蔵は明治二十三年の生れで、折口とはほぼ同年代である。明治三十七年に小学校の高等科を卒業して光風館書店に入店、以後は出版人・歌人として活躍し、大正十五年に四海書房を設立して、この『神道講座』や柳田國男等監修の『郷土科学講座』などの講座もの、あるいは『研究評論　歴史教育』などの雑誌、種々の単行本を出版して終戦を迎へた人物である。また、「民間信仰と神社と」の続編掲載が当初から予定されてゐたかどうかは不明であるが、内容的には完結してゐると見て不都合はない。さらに折口も紹介してゐるやうに、当該論文と対をなす「原始信仰」も同講座に掲載される予定であつたが、最終の昭和六年十二月刊行の第十二冊にも収録されず、昭和六年九月発行の『郷土科學講座』第一冊に収録されてゐる。四海書房は四海民蔵の個人経営であり、また四海は折口も参加した歌誌『日光』の同人として同誌を発行してゐたから、その程度の融通は利いたのであらう。筆者が知る限り、折口信夫にはかかる「遣り方」が目立つのであり、これを考慮に入れた「人と学問」研究が折口にも必要と「解題」を見て痛感し一言したまでである。

（43）東京日日新聞社記者の大塚虎雄は『學界新風景』（天人社、昭和五年四月）で「古い時代」を専攻する國文學者の新人として折口を取り上げ、「氏は國學院出身の秀逸、書齋裡の學臭味を脱した少壮學者である。歌人釋迢空とは氏のこと。常に江湖に漂白して（といふと大げさだが）未研究の題材を捕へて來ては鋭い批評眼で、清新な學説を學界に提供する。」と好意的に紹介してゐる。

(44) 折口の中国訪問は「決定版全集」36の「年譜」昭和十六年の項には「八月、中華民国に旅。…三日から北京で皇典講究所の講演会（三日間）。北京武道殿で「古代人の信仰」を講演。」とある（「第一次全集」、「第二次全集」も簡略ながら「八月」説である）。他方、『國學院大學八十五年史』では昭和十六年の「同年（昭和十六年のこと）九月二日より五日間、北京武道殿で皇道講座を開設し、本大學の折口信夫教授「古代人ノ信仰」云々と記されてゐる。これが『國學院大學百年史』下巻になると「同年」を読み違へて「十七年九月二日より五日間」と一年後の昭和十七年九月のこととなつてゐる。昭和十六年九月二十日付けの『國學院大學新聞』（第百二十二号）では「北京で短期神祇講座　華北總署で開設す」の三段見出しで「去る二日より六日までの五日間、神祇界に於ける權威者を現地に招聘して神祇短期講習を北京武道殿で開催、多大の成果を收めた。講師竝に演題は次の如くである。古代人の信仰　文學博士　折口信夫」云々と報じてゐる。当の華北總署の機関誌『惟神道』創刊号（第一巻第一号、昭和十六年十二月）には「惟神大道を闡明弘布し以て大東亞建設の根本理念を一層鞏固にするとの意圖のもとに皇典講究所華北總署主催、北京日本大使館、興亞院華北連絡部後援のもとに九月一日から五日間、北京武道殿に於て開催されたる「短期皇道講座」は、豫期以上の成績を治めて無事修了したこの講座の聽講者は華北蒙疆各地からの出席者で延人員約一千名に達した。演題竝講師　古代人の信仰　文學博士　折口信夫（以下略す）」と記されてゐる。因みに、村田正志も昭和十六年の「八月末には中華民国に講演の旅に行つてゐられる。…九月二十二日帰京されてゐる。」と記してゐる（「八月十五日」、『國學院雜誌』第五十五巻第一号、昭和二十九年五月）。また伊原宇三郎も同様のことを記してゐる。註20『三田文学』、参照。

(45) 鳥野幸次は明治六年に生まれ、同二十九年に國學院を第三期生として卒業した後、学習院教授を経て大正十二年に國學院大學教授、宮内省御歌所寄人に就任し、国文学者・歌人として活躍した。杉浦重剛や今泉定助の薫陶を受け、道徳・倫理関係の編著書等も多数あり、折口信夫の師である三矢重松の『中等新国文』の修訂などもしてゐる。戦後は宮内庁侍従職御用係、相模女子大学教授などを務め、昭和三十六年に死去した。

(46) 前掲岡野『折口信夫伝』、二七三頁。

(47) 神道行法家の川面凡児の「禊行」は昭和十五年の大政翼賛会の設立によつて「国民的行事」として採用され、横光利一なども文学界を代表して参加するなどの普及を見たが、折口はこの状況を快く思つてゐなかつた。折口と近い立場にあつた鶴岡八幡宮の宮司（前内務省神社局考証官）であつた座田司氏も同様で、「古來の禊行事は主として修驗者によつて現今まで傳承せられてゐたので、現行の禊行事には、種々の分子が附加せられて、稍々もすれば、その本旨が誤り

傳へられようとしてゐる。」として昭和十六年十二月に『禊の理論と実際』（長谷川書房）を出版してゐるが、その中で注目すべきは「参考書」として折口の『古代研究』と武田祐吉の『古典の精神』を挙げてゐることである。因みに、折口は座田とは懇意で、昭和十七年にも鶴岡八幡宮での「國學講座」で『萬葉集』の講師を担当してをり、戦後も雑誌『悠久』の座談会にも参加してゐることは周知の通りである。

（48）新潮社から「新潮文庫」の第二百七十四編として昭和十三年一月に刊行された折口信夫・澤潟久孝・土岐善麿共著の『萬葉集研究』は「決定版全集」1の「解題」も指摘してゐるやうに、昭和三年九月に刊行された新潮社の『日本文學講座』第十九巻所収の「萬葉集の研究」にはなかつた「かむながら」を、同じく新潮社から昭和十年六月に刊行された『日本精神講座』第十二巻所収の「日本古代の國民思想」の関連部分を追加して編まれたものである。また「日本古代の國民思想」は同じく新潮社が昭和十三年五月に刊行した『日本國民思想讀本』にもほぼそのまま収録されてゐる。『萬葉集研究』が文庫本として広く普及し読まれたことは確かであり、折口の「かむながら」論にある「これを名詞で申さば「現神（あきつかみ）」といふ事になるのであらう」といふ行に注目した讀者がゐても当然であらう。なほ、昭和十一年一月には武田祐吉が『萬葉集と忠君愛國』を出してをり、後には文部省教学局編纂の「日本精神叢書」の一冊にも加へられ、武田の「神ながら」論や「大君は神にしませば」論も折口同様に広く読まれてゐる。なほ、武田祐吉の「神ながら」論等については、國學院大學研究開発推進機構助教・渡邊卓氏から多くを学んだ。記して謝意を表する。

（49）北原白秋は「長き時堪へに耐へつと神にしてかく歎かすか暗く坐しつと」、川田順は「たたかひは朕が志ならずと宣り給ふ大詔勅にいのちは捨てむ」とそれぞれ詠ひ、吉井勇は「神靈はわが上にありとたたかひ宣らす御言葉嚴かつきしかも」と詠んだ。また、春日井濵はもつと直截に一国民（臣民）・一人間として「一人御やすらかにありたまふ願ひのほかにかへりみるなし」と淡々と天皇の「宸襟」を安んずる歌を詠んだ。折口だけが「人間天皇」の苦悩を歌として表現したわけではない。

（50）『藝能』（『舞踊藝術』改題）六月号（第九巻第六号）の「藝能學會資料」の項には「五月十八日「招魂の御祭」の御話などを中心に、折口博士、金田一博士外六名で懇談會を行つた。」との記事が掲載されてゐる。

（51）石川公彌子『〈弱さ〉と〈抵抗〉の近代国学―戦時下の柳田國男、保田與重郎、折口信夫』（講談社、二〇〇九年）、一八八頁。なほ、折口の「招魂の御儀を拜して」など戦時下の「靖國思想」については拙稿「戦時下の「靖國思想」に関する一試論」（『皇學館大学研究開発推進センター神道研究所紀要』第三十輯、平成二十六年三月）、参照。

（52）これらの歌が、熊本県山鹿出身で県立鹿本中学校から海軍兵学校に進んで海軍士官となり、昭和十七年五月のシドニー湾特殊潜航艇出撃で「戦死」した松尾敬宇海軍大尉（死後中佐）と父母との「無言の別れ」を主題としてゐることはいふまでもない。この松尾らの壮烈な「戦死」は菊池寛によつて映画化されるなど大きな話題となつたが、折口は昭和十七年六月の『婦人日本』に「若き神」八首を掲載するだけでなく、『鳥船　新集第二』にも同じ「若き神」と題して「死ぬることかへる如しと　古人は　宣言ひにり。若きが　こほしき」など十首を載せてゐる。但し、発表媒体によつて語句に若干の相違がある。中でも重要なのは「潛く舟」の第五句が『天地に宣る』では「神成りにけり」、『鳥船　新集第二』では「神生りにけり」となつてゐることである。

（53）この『週刊少國民』の号には「靖國遺児」の姉妹が実名で登場してをり、「感激と哀しみ」が入り混じつた姉妹の会話が掲載されてゐる。無論、当時なりの「編輯」が加へられてゐるだらうが、それでも折口の「感想」と大きく相違するものではない。

（54）「第一次全集」第廿二巻、四一二頁。

（55）この折口の歌が発表されて間もない昭和十九年十二月、岡野直七郎は次のやうに評した。即ち、「十月二十二日の毎日新聞に「新神降りたまふ」の題で發表された歌の最後のものである。「新神」とはこの秋の靖國神社臨時大祭に齋き祀られた護國の英靈二萬百九十七柱のことを申すのである。・・・右の歌は新しい神々の魂として靖國の宮に集つたつはものの心ざまを詠じたものである。「からきいくさ」は辛き戦すなはち困難な戦闘のこと。こゝに集つた諸々の勇士の魂は、今は神にましますから、生前に戦つた幾多の難戦苦闘をも、明るく平かに澄んだ心で思ひ出でてゐられるであらうといふ意である。日本の勇士が散る戦は「からきいくさ」ならざるは無い。たやすい戦は一擧に決し死傷はあり得ない。生きながら喘ぐ激戦と神となりまして後の明淨和平な心との對照に、この歌の眼目があるやうに思はれる。さうしてかういふ神靈の裏にうち入り之を着想するところに、この作者の鋭さと特異さとがある。靖國神社の歌も數多いが、かかる靈の世界につきこんだ詠風は稀である。」と（「現代短歌の觀賞（六）」、『日本短歌』第十三巻第十二号、昭和十九年十二月）。これは、「草莽」の民としての一銀行員・歌人による、同時代人から見た「折口戦争歌」の最も端的な評価と言へよう。

（56）「第一次全集」第廿二巻、四一二頁。

（57）昭和十九年十月の招魂式・臨時大祭については前掲拙稿「戦時下の「靖國思想」に関する一試論」、参照。新聞は「畏

し諸事簡素に　参列は東京在住遺族のみ」と報道し、十月二十二日夜の招魂式に引き続き二十三日午前に臨時大祭、午後に例大祭が執行されるといふ「異例の合祀」と報じてゐる（昭和十九年十月二十二日付け『毎日新聞』戦時版）。

（58）「民族の戦士」・「文化の戦人」といふ語句は、昭和十八年十月の「学徒出陣」を承けて慶應義塾の「教へ子」の出陣学徒のために物された「民族のいくさびとに贈る」と題する小文にあり、「決定版全集」の「解題」によれば同年十二月十日付けの『三田新聞』（第五百三十八号）に掲載されたといふ。それから一年後の昭和十九年十二月十日付けで刊行された『鳥船　新集第三』（青磁社）にも折口は「釋迢空」名で同題で掲載してゐる。折口は語り掛ける、「だが諸君は日本の若者であり、「大倭のいくさびと」である。紀元前後に渉つて、我がいくさびとのみ持つことが出來、又其を喜びとした「戦陣の歌びと」であることは、諸君も亦與る所の、大倭の祖先傳來の若男としての誇りである。「文化の戦人」と言ふ資格は、昔から今に傳はる日本の若い軍人の傳襲する「生寶」である。どうか、此の生寶だけは、かたくかたく抱いて、戦陣の生活の間にも磨いて來て貰ひたい」、と。ここに、折口の「優しさ・人間性」を見る研究者もゐることは確かであらう。最早、「默居（モダシヲ）」るしかない。

（59）『鳥船　新集第二』、二二五頁。この合同歌集で藤井貞文は「大詔　くだしたまへり。かむながら　正しき國はまさに興れり」といふ歌を載せてゐる。藤井は「かむながら」をどう解釈したのだらう。また藤井春洋の「三日にわたりて、東京より「愛國歌」放送講演あり　さかりつゝ　久しとぞ思ふ。曉のらぢおの御（ミ）聲　われは聞き了へぬ」といふ一首もある。以て、戦時下の折口信夫の影響力を思ふべしである。なほ、どうでも良いことだが、昭和十九年四月刊行の再版本の「奥付」には「昭和十八年五月十六日　初版印刷　昭和十八年五月二十日　初版發行（二〇〇〇部）　昭和十九年四月二十日　再版發行（二〇〇〇部）」とある。

（60）前掲註57でも触れたやうに、『鳥船　新集第三』は昭和十九年十二月に青磁社から刊行されたのであるが、編者は折口信夫自身で装丁も紙質も前二書とは比較にならないほど「豪華」であり、定価三円六十銭で三〇〇〇部発行されてゐる。表紙の写真も「やはり、萬葉地理を表現したつもりである。「布勢の海にかへる」と命けたよさ相な圖どりを見てください。」云々と「追ひ書き」（昭和十九年七月十四日付け）で書いてゐる。同年六月には藤井春洋とも会ひ、「私は今安心して、彼の行くへを見てゐる。歌もこれなら、存分飛躍することであらう。」といふ余裕が暫しあつたからである。

（61）この歌を含む五首が「再奇瑞を讃ふ」として『日本評論』の昭和十八年十二月号に掲載されたが、その「編輯後記」には「菊薫る朝、東亞の盟友一堂に會し、世界史を畫する大東亞共同宣言中外に宣布されるその時果然ブーゲンビル沖

航空戦の捷報陸續として到る。」と記されてゐる。折口が開戦二周年を前にして「再奇瑞」を大本営発表に見たとしても、それは不思議ではないのが当時の日本であつた。折口の「再奇瑞」が掲載されてゐる次の頁には草野心平の詩「大東亞宣言國民大會」も掲載されてゐる。折口の「抵抗」も「戦争責任」も、まづは時代状況の冷徹な分析をしてからの話である。

(62)「第一次全集」、四一三頁。

(63)村田正志、前掲註44「八月十五日」。

附記　本稿は、①「平成二十五年度國學院大學国内派遣研究」研究課題「近代日本の対外政策と国家神道との関連について」及び②國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センターの平成二十五年度研究事業「昭和前期における神道・国学と社会」に係る中間成果の一部である。なほ、本稿は①の研究課題である「対外政策」としての「戦争」に重点を置いたものであり、戦前・戦中期における折口信夫など当時の研究者・思想家による天皇論を含む神道・国学論には立ち入つた検討は加へてゐないことを断つておく。